

モンゴル = オイラット 関係史

——十三世紀から十七世紀まで——

宮 脇 淳 子

(日本学術振興会)

History of the Mongol-Oyirad Relations:

From the Thirteenth to the Seventeenth Century

MIYAWAKI, Junko

Japan Society for the Promotion of Science

In 1662, *Ĵasaγtu Qaγan* of the Right-Wing *Qalqa* Mongols in Outer Mongolia was murdered by *Erinčin Lobsang Tayiji*, one of his kinsmen who is always referred to as *Altyn Tsar* in Russian sources. It was an incident that marked the final phase of the Mongol-Oyirad relations going back over four-hundred years. The Oyirad, when they first appeared in history at the beginning of the thirteenth century, were a tribe inhabiting the present-day Tuva in subjection to *Činggis Qaγan*. The tribe, however, underwent a considerable change in its ethnic composition by the time it appeared in the seventeenth-century Mongolian and Russian records. History of North Asia after the fall of the Mongol *Yüan* Empire in 1368 revolved around the Mongol-Oyirad rivalry. What set the Mongols and the Oyirad, both Mongolic-speaking nomadic peoples, apart, then? The Mongols in the narrower sense, that is, those after 1368, comprised the groups that derived themselves from those used to be loyal to the *Yüan* emperors, while the Oyirad were an anti-*Yüan* alliance of the tribes who had never been directly subject to them, including the old Oyirad, the *Naiman*, the *Kereyid* and the *Baryud*. This new tribal federation, now known as the *Dörben*(Four) Oyirad, controlled most of Mongolia for a century after the fall of the *Yüan*, until the Mongols in the narrower sense were finally brought together to form a federation under *Dayan Qaγan*. The Mongols now began a series of conquests of the Oyirad, in the course of which they spread their pastures over the present-day Outer Mongolia, pushing the Oyirad further and further into the Northwestern corner of North Asia. Mongol power was then divided among many tribes. Among them, the *Qalqa* represented the central force in the Mongol expeditions against the Oyirad, who were driven beyond the *Irtys*. From the late sixteenth to the early seventeenth century, the *Qalqa* Mongols were the overlord of the Oyirad. The Mongol khan who ruled the Oyirad was *Ubasi Qong Tayiji*, grandfather of *Erinčin* the murderer of his clan-leader *Ĵasaγtu Qaγan*. The Russians and the

Manchus, in the meanwhile, were moving in on the borders of the Mongols and the Oyrad. The Mongols of Inner Mongolia surrendered to the Manchus in 1634, leaving the Qalqa alone in Outer Mongolia. The only way left for the Qalqa to survive was to form an alliance with their former enemy the Oyrad. Altyn Tsar, who once ruled supreme over the Oyrad, lost his political *raison d'être*. In the Oyrad federation, too, the seat of leadership shifted all too rapidly, upsetting tribal balance of power. Under such historical circumstances, Erinčin, the third Altyn Tsar, committed his fratricidal act of 1662.

第一章 導入——十七世紀のハルハ	第二節 モンゴル
第二章 十五世紀に至るモンゴル=オイラット関係	第四章 十五世紀以後のモンゴル=オイラット関係
第一節 十三世紀から十四世紀末まで	第一節 ハルハ部の成立
第二節 史料の性格とその時代	第二節 モンゴルのオイラット征伐
第三節 十四世紀末から十五世紀中葉まで	第五章 ドルベン・オイラットの構造と牧地
第三章 遊牧諸集団の構造	第六章 結論——ハルハ右翼とオイラット
第一節 ドルベン・オイラット	

第一章 導入——十七世紀のハルハ

1634年内モンゴル各部が満洲族に征服された後も、外モンゴル・ハルハ (Qalqa) 部は漠北の地において一応の独立を保っていた。ハルハ部の王公たちは、同族である内モンゴル諸部が満洲族——1636年国号を大清と定め、1644年には北京に入って中国を支配するに至った——の支配下に入ったことに脅威を覚え、1640年にはこれまで長年敵対関係にあった西隣の異族オイラット (Oyrad) と同盟し、モンゴル・オイラット会議を開催した。また1646年、内モンゴル・スニット (Sönid) 部長が清に叛いてハルハに逃れた時、ハルハ左翼の王公たちはこれを援けて清軍と戦った。

しかし、このスニット部の叛乱が清朝によって鎮圧されると、ハルハ部の王公たちはこれ以上清朝と争うことの不利を悟り、1655 (順治十二) 年子弟たちを清廷に來朝させたのであった。この年清朝は宗人府で会盟してハ

ルハの代表的な王公八人にジャサク (Jasaḡ) の称号を授け、彼等に毎年白駝一匹白馬八匹を各々清朝に進貢するよう命じた。これが「九白の貢」の始まりである。

このようにして外モンゴル・ハルハ部は清朝の同盟国となった。この時点ではまだ、清朝はハルハ部を直接支配下に組み込む意図は持っていなかった。満洲族は非常に少数で中国の支配民族となったのであるから、とても膨脹政策など取る余裕はなかった。十七世紀後半、中国国内では三藩の乱が勃発し、北方アムール河 (黒龍江) 流域ではロシアとの関係が緊迫化していた。清朝にとっては、自国と友好関係にあるハルハ部が露清間に位置し、ロシアに対して自ら辺境防衛の任にあたっていてくれればよかったのである。

ところが、この清朝の期待に反してハルハ部に内紛が起り、その結果西隣のオイラットの新興勢力ジュン・ガル (Jegün ḡar) 部のガルダン (Galdan) の侵入を招くことにな

った。ガルダンとの戦いに敗れたハルハの人人は1688(康熙二十七年)年内モンゴルに逃れて清朝の保護を求めたのである。1691(康熙三十一年)年内モンゴルのドローン・ノール(Doloyan Naγur)においてハルハ左右翼の王公達は清の康熙帝を自らの君主として推戴し、ここに至って外モンゴル・ハルハ部は完全に清朝治下に入ったのであった¹⁾。

このハルハの清朝帰属の発端となった内紛について、『欽定外藩蒙古回部王公表伝』は次のように伝えている。

1662(康熙元年)年、清朝の設置した八ジャサクの一人でハルハ右翼に属したエリンチン・ロブサン・タイジ(Erinčin Lobsang tayiji 羅卜蔵台吉額琳沁)が、同じ八ジャサクの一人でハルハ右翼の宗主であったワンチュク・ジャサクト・ハーン(Vangčug Jasaγtu qaγan 札薩克凶汗旺舒克)を私憾によって襲殺した。同じハルハ右翼のアハイ・ダイチン(Aqai dayičing 阿海岱青)は、ハルハ左翼における清朝任命のジャサクたち、チャグンドルジ・トシェート・ハーン(Čaγun dorji Tüsiyetü qaγan 土謝凶汗察琿多爾濟)とダンジン・ラマ(Danjin blama 丹津喇嘛)の援兵を得てエリンチンを撃つたため、エリンチンはオイラットに逃れた。この紛争で、ジャサクト・ハーンの多くの属衆が難を避けてトシェート・ハーンの属下に入ったのである。ジャサクト・ハーン位は、殺されたワンチュクの兄であるチュウ・メルゲン(Čuu mergen 綽墨爾根)が継いで自らハーンを称したが、ジャサクト・ハーンの属衆はトシェート・ハーンに帰したままであった。この事件より八年後の1670(康熙九年)年、清朝側はジャサクト・ハーンを自称するチュウ・メルゲンが清に朝貢しなかったことを理由に、新たにワンチュクの弟チェンゲン(Čenggün 成袞)をジャサクト・ハーンに封じた。また、先にエリンチンを撃つてオイラットに走らせ、今回はチェンゲンのジャサクト・ハーン位継承を清朝に願い出

たハルハ右翼のアハイ・ダイチンを、エリンチンの代わりに新たにジャサクに任命した²⁾。

『王公表伝』喀爾喀扎薩克凶汗部の各列伝を総合して記述すると以上の如くである。この後、新たにジャサクト・ハーン位に就いたチェンゲンは散逸した属衆を集めようとしたのであるが、それでもなおトシェート・ハーンに帰したジャサクト・ハーンの衆は戻らず、これが発端となってハルハは左右翼に分裂し、内部紛争は甚しくなっていた。そうこうする間やはり『王公表伝』によると、1682(康熙二十一年)年近くなってオイラットのガルダンはエリンチンをジャサクト・ハーンに送還してきたという。チェンゲン・ジャサクト・ハーンは、エリンチンがもと八ジャサクに名を列ねていたその旧制通りに、自分に随わせて清朝に入貢させた。ところが、エリンチンは己の前罪を懼れて、ロシアと共謀して却ってチェンゲンを攻めようとしたため、チェンゲンはこれを知って自分の息子シャラ(Šara 沙喇)にエリンチンを撃たせた。エリンチンは再びオイラットに逃れ、チェンゲンは彼の属衆や家畜を悉く収めたということである。

オイラットのガルダンは、属衆をめぐる左翼の領袖トシェート・ハーンと右翼の領袖ジャサクト・ハーンとの紛争において、姻戚でもあったジャサクト・ハーン家を支援し、ついに1688(康熙二十七年)年ハルハに侵入してトシェート・ハーンの率いるハルハ左翼軍を敗り、結局ハルハの人々のほとんどを清朝に走らせてしまった。

十七世紀清朝帰属前のハルハ・モンゴルが、従来言われていたような三ハーン部に分かれてはいず、トシェート・ハーンの率いる左翼とジャサクト・ハーンの率いる右翼とに分かれていたことについての論証は、以前すでに筆者が行なっている³⁾。しかし、どうして同じハルハ部の中に、ハーンが二人——実はさらに数人——存在するのであろうか。しかも、その数人のハーンたちは、清朝の設置した

1) 宮脇 1979, pp. 108-138.

「ジャサク」という称号において、他の王公たちと比べて全く対等な扱いしか受けていないのである。

ハルハの清朝帰属の原因となった内乱は、最後にはトシェート、ジャサクト両ハーン間の紛争となったが、その発端はハルハ右翼の内部で起こったものであった。父ノルブの跡を継いでジャサクト・ハーンとなったばかりのワンチュクを、同族のエリンチン・ロブサ

ン・タイジが「私憾」をもって殺したという。その「私憾」とは一体何だったのか。

ハルハ右翼の王公エリンチン・ロブサン・タイジの祖父ショロイ・ウバシ・ホンタイジ(Šoloi ubasi qong tayiji 碩壘烏巴什渾台吉)は、十七世紀初めウブサ・ノールに本営を置いて盛んにオイラットを攻撃したことで知られている。ショロイ・ウバシは結局1623年のイルティシユ河の決戦でドルベン・オイラット

- 2) 『王公表傳』卷之六十一，傳第四十五。「喀爾喀扎薩克圖汗部總傳」
 順治十六年(1659)，遣大臣齎服物，諭賚之。先是喀爾喀左右翼設八扎薩克，諾爾布，及俄木布額爾德尼，車臣濟農，昆都倫陀音，各領右翼扎薩克之一。諾爾布卒，子旺舒克襲，仍號扎薩克圖汗。俄木布額爾德尼卒，子額璘沁襲，號羅卜藏台吉。
 康熙元年(1662)，額璘沁以私憾襲殺旺舒克，奔就厄魯特。其叔父袞布伊勒登，避難來歸，封扎薩克貝勒，駐牧喜峯口外察平朔圖。詳喀爾喀左翼部總傳。
 九年(1670)，命旺舒克弟成衮，襲扎薩克圖汗號，輯其衆。
 二十三年(1684)，成衮以額璘沁之亂，屬衆潰，多往依左翼土謝圖汗察理多爾濟，屢索不獲，與構釁。命阿齊圖格隆等，諭解之。會成衮卒。厄魯特噶勒丹，謀掠喀爾喀，誘成衮子沙喇，攻察理多爾濟。沙喇因會噶勒丹於固爾班赫格爾，台吉德克德赫等從往。察理多爾濟惡之，追殺沙喇及德克德赫。
 二十七年(1688)，噶勒丹以兵三萬，掠喀爾喀，至杭愛山，所部大潰。沙喇弟策旺扎布，偕同族色凌阿海等，相繼來歸。詔附牧烏喇特諸部界。
 同，「原封扎薩克圖汗和碩親王策旺扎布列傳」
 策旺扎布喀爾喀部人，姓博爾濟吉特，元太祖裔格塔森扎扎賚爾璦台吉之七世孫。其曾祖曰素巴第，為喀爾喀三汗之一，號扎薩克圖汗。子諾爾布繼之，有子四，長綽墨爾根，次旺舒克，次成衮，次噶勒丹呼圖克圖。成衮子三，長沙喇，次色布騰，次即策旺扎布。初旺舒克嗣父諾爾布，稱汗，為同族羅卜藏台吉額璘沁所戕。土謝圖汗察理多爾濟及丹津喇嘛兵擊之，額璘沁奔厄魯特。旺舒克兄綽墨爾根因自立為汗，以末請於朝，衆弗附，多歸察理多爾濟。
 康熙九年(1670)，詔廢綽墨爾根，以成衮襲扎薩克圖汗。
 二十一年(1682)，命都統阿密達等，往齎冠服佩帶弓刀器幣。成衮既襲汗，遣告察理多爾濟，索逃衆，匿弗予。至是，厄魯特台吉噶勒丹送額璘沁歸，成衮以舊列入扎薩克，令隨已入貢。額璘沁懼前罪，約俄羅斯，攻成衮。成衮覺，遣子沙喇，率兵萬餘，襲執額璘沁，尋逸，復奔厄魯特。成衮盡收其戶畜，復遣赴察理多爾濟所，索逃衆。會達賴喇嘛遣阿爾布奈，召察理多爾濟，與成衮盟，卒弗聽，成衮自是與察理多爾濟交惡。
 二十三年(1684)，遣阿齊圖格隆，約達賴喇嘛使，赴其部諭和，會達賴喇嘛所遣色木巴陳布呼圖克圖，至歸化城疾卒，召阿齊圖格隆還。
 二十五年(1686)，達賴喇嘛復遣噶勒丹西勒圖往，尚書阿喇尼齎敕會，未至，成衮卒。詔其子沙喇，襲扎薩克圖汗，尋隨阿喇尼，赴庫倫伯勒齊爾，與察理多爾濟盟。察理多爾濟僅歸逃衆半，復交惡。
 二十六年(1687)，噶勒丹與察理多爾濟構兵。沙喇女兒之夫曰阿喇布坦，為噶勒丹戚屬。噶勒丹誘沙喇往會，沙喇因率台吉德克德赫，卓特巴移牧，就阿喇布坦。察理多爾濟追及之，沙喇被殺，屬衆潰。
 二十七年(1688)，噶勒丹掠杭愛山，遷沙喇妻布尼達喇，子巴朗，恭格，格色克，居阿爾台山陽。策旺扎布隨母扎爾穆，轉徙年餘，遂相失。
 二十九年(1690)三月，巴朗等由阿爾台逃歸，遇卓特巴，偕內附，聞同族岳蘇圖阿海游牧烏蘭，往依之。五月來朝，乞襲封。
 同，卷之六十六，傳第五十，「扎薩克一等台吉額爾德尼袞布列傳」
 康熙元年(1662)，扎薩克圖汗旺舒克，為羅卜藏台吉額璘沁所戕。阿海岱青，會土謝圖汗察理多爾濟兵，擊走額璘沁。
 九年(1670)，請於朝以旺舒克(弟)成衮嗣稱汗，遣使貢駝馬。詔嘉之，授扎薩克，代額璘沁貢九白。
- 3) 宮脇 1979.

連合軍に殺されたのであるが、その孫であるエリンチンは、なぜ同族であるハルハの王公たちを敵にまわし、オイラットへ逃れたのか。

これらの疑問を解明するためには、歴史を溯らなくてはならない。十七世紀初めからのハルハ=オイラット関係へ、十六世紀のハルハの成立とこの時期のモンゴル=オイラット関係へ、さらにそれ以前のオイラット史へ。

第二章 十五世紀に至るモンゴル=オイラット関係

第一節 十三世紀から十四世紀末まで

オイラットという名を持つ部族がはじめて歴史に登場するのは十三世紀初めのことである。ラシード・ウッディーン『集史』の「部族篇」によると、このオイラットの住地は八河(Секиз-мурэн)でトマト(Тумат)の故居であったという。八河とは、現モンゴル人民共和国西北隅に位置するホブスゴル湖(Хөвсгөл нуур)の西隣のダルハト(Дархад)盆地を南から北へ貫流するシシヒト河(Шишхид гол)からクィズィル・ヘム(Кызыл-Хем)、小イエニセイ(Ка-Хем)、上イエニセイ(Улуг-Хем)へかけてのイエニセイ河上流とその支流のことである。このように今のトゥワの地に拠った十三世紀のオイラットは、北方ではサヤン山脈をへだててキルギス(Kirgiz)の住地に接し、南方ではタンス・オーラ山脈を境にナイマン(Naiman)と隣っていた。東方ではセレンゲ河のメルキト(Merkid)に連り、東北方ではアンガラ河のトマトの地に近かった。これら隣接の諸民族のうち、トマトはバルグト(Baryud)の一部であり、メルキトとともに、モンゴル人と同系のタタルで、オイラットの住地を南北から挟む形のナイマンとキルギスはトルコ系であっ

た。ラシード・ウッディーンに拠ると、オイラットの言語はモンゴル語であるが、他のモンゴル族の言語とは多少異なっていたらしい。また、すでにこの頃から、オイラットは人口が多くて、いくつもの部に分れていたと伝えられている⁴⁾。

オイラット王クトカ・ベキは、初めナイマンやメルキトのハーンたちと連合してモンゴルのチンギス・ハーンと戦ったが、1208年チンギス・ハーンに降った後、却ってこれのナイマンとメルキト征討を助けた。それ以来、オイラット王クトカ・ベキは所領を安堵されて、四千戸に将としてチンギス・ハーンに臣事したという⁵⁾。この後十三世紀のオイラット王家は、チンギス・ハーンの子孫のジョチ家、チャガタイ家、オゴデイ家、トルイ家のすべてと婚姻を通じ、ことにトルイ家の四兄弟、モンケ、フビライ、フレグ、アリク・ブガとはいずれも姻戚となった。これはその住地が東南はトルイ家、西南はオゴデイ家、チャガタイ家、西北はジョチ家の封地と連り、帝国が元朝、チャガタイ・ハーン国、イル・ハーン国、キプチャク・ハーン国の四大ウルスに分裂した後も、それらの接点に位置するという戦略上の要衝だったからである⁶⁾。

その帝国の分裂の機縁となった1260-64年のアリク・ブガの乱において、オイラットはアリク・ブガの側に立ってフビライ軍と戦った。戦争の運命を決した1261年のシムルタイ湖の戦で、フビライ軍に粉砕されたアリク・ブガ軍は多数のオイラット兵から成っていたという。アリク・ブガ家とオイラットとの姻戚関係は非常に緊密であり、オイラットの住地であるトゥワは、アリク・ブガの領地の内に含まれていたと思われる⁷⁾。

我々はこの争乱を普通「アリク・ブガの乱」と呼ぶが、これは元朝側に立った見方である。

4) Хетагуров 1952, pp. 118-121. 岡田 1974, pp. 2-3.

5) Смирнова 1952, pp. 121-2, 146-152, 269. Хетагуров 1952, pp. 137-138. 岡田 1974, pp. 1-2.

6) 岡田 1974, pp. 3-6.

7) Верховский 1960, p. 163. 『元史』120.「朮赤台列伝」岡田 1974, pp. 6-7.

トルイ家の長子モンケ・ハーン歿後、はやくから漢地の統治を委託されていた次弟フビライは、東方大興安嶺方面に位置していたチンギス・ハーンの左翼万戸のジャライル部族等の支持を受けて、1260年春内モンゴルの開平府 (Doloxan naγur 現多倫県) で自派のクリルタイを召集してハーンに選挙された。同年夏、故モンケ・ハーンの末弟アリク・ブガは、モンケ一家とチャガタイ家の諸王の支持を受けて、カラコルムで開かれたクリルタイでやはりハーンに選挙されたのであった。このように二人のハーンが対立して、モンゴル帝国は真二つに分裂するという事態になった。両ハーンの戦闘は、漢地の豊富な財力と、モンゴル軍の精鋭部隊をにぎっていたフビライ側の勝利に終り、飢饉に悩まされたアリク・ブガは1264年兄フビライに降って、はじめてフビライはモンゴル帝国の大ハーンとなった。しかしそれは表面だけで、実際には帝国は四つに分裂してしまっていた。フビライが中国に建てた元朝は、漢地と内モンゴルを勢力下に収めたが、外モンゴルはその後もオゴデイ・ハーンの孫ハイド等に脅かされた。ハイドが病死してこの方面に平安が訪れるのは1301年のことである⁸⁾。

アリク・ブガに加担してフビライ軍に粉碎されたオイラットのその後の動向は全くわからない。トゥワの地は元朝からは遙かに遠く、その勢力圏外であったことだけは確実である。フビライ家の建てた元朝においてオイラット人はほとんど何の役割も果たさず、『元史』に僅かに残された記述では、ハイドの乱の最中にオイラット兵がやはり元軍と戦ったことが知られるだけである。唯一人例外的にオイラットのベクレミシュ (別乞里迷失, 別急里迷失, 別吉里迷失) なる人物が元朝に仕官し、ハイド側に寝返ったモンケの第四子シリギ討伐に功を挙げて、淮東行樞密院から中書右丞、さらに同知樞密院事にまで昇ったが、この人

物も結局罪をもって誅せられてしまった。十三世紀末のことである⁹⁾。

この後ほぼ一世紀の間オイラットの動静は史上に現われない。オイラットのみならず、元朝を通じてアルタイ以西の情勢はほとんど知られないままである。

十四世紀中葉、元朝治下の中国でモンゴル人の支配に対する反抗が始まった。まず塩商人方国珍が乱を起し、次いで宗教秘密結社の白蓮教徒の組織する紅巾の乱が各地で一斉に勃発した。この乱によって元朝政権は衰弱し、ついに1368年、紅巾軍の残党である朱元璋が大明皇帝の位について元の大都を攻撃すると、元の順帝トゴン・テムル (Toyon temür) は大都を捨てて上都開平府に逃れ、さらに内モンゴルの応昌府に逃れた。1370年明軍はこの地に追撃したが、順帝トゴン・テムルは病死し、皇太子アーユシュリーダラ (Äyüsrīdhara) はかろうじて脱走して帝位に即いた。これが昭宗である。昭宗はこの後外モンゴルのカラコルムを根拠地とし、明朝に対する防衛にあたったのであるが、この頃元朝の残存勢力は依然として強大で、1372年三道に分かれて外モンゴルに侵入した十五万の明の大軍は、トウラ河方面で元軍の迎撃を受けて数万人の戦死者を出して退却せねばならなかったほどである。

1378年に死んだアーユシュリーダラ・ハーンの跡を継いだのは、その弟と思われる天元帝トクズ・テムル (Toquz temür) である。1387年、明軍は北満洲に進出して、ムハリ国王の子孫ナガチュの率いる二十余万の元軍を投降させた。これによって生じた東部戦線の危急を救うため、トクズ・テムル・ハーンは自ら外モンゴル東辺のブイル・ノール (Buyir naγur) 湖畔に出向いて高麗と連絡をとり、明軍を挟撃しようとしたが、却って翌88年明軍の奇襲を受けて大敗し、数十騎とともにカラコルムを指して落ちていく途中、トウラ河

8) 岡田 1981, pp. 165-168.

9) 『元史』9, 10, 127, 132, 165, 166. 岡田 1974, pp. 7-8.

畔に至ってアリク・ブガの子孫イエスデル(Yesüder)の軍に殺された。こうしてフビライ家は断絶したのである¹⁰⁾。『明太祖実録』はこれを次のように叙している。

「ブイル・ノールに敗れたトクズ・テムル(脱古思帖木兒)は、その余衆を率いてカラコルムに還って丞相ヤウジュ(咬住)に依ろうとし、行ってトーラ河に至ったところ、イエスデル(也速迭兒)に襲撃されてその衆は潰散した。トクズ・テムルはただ知院ネケレイ(捏怯来)ら十六騎と遁れ去ったが、たまたま丞相ヤウジュ、太尉マルハザ(馬兒哈咱)が三千人を領して迎えに来た。それからココ・テムル(闊闊帖木兒)の人馬が衆多なので、往ってこれに依ろうとしたところが、たまたま大雪で三日も出発できなかった。イエスデルは大王ホルフダスン(火兒忽答孫)、王府官ボロト(孛羅)を遣してこれを追襲せしめ、トクズ・テムルを獲て弓絃をもってこれを縊り殺し、あわせてその太子天保奴を殺した。」¹¹⁾

このときイエスデルに事えるのを恥じて明に降ったネケレイ(捏怯来)の報告を、甲種本『華夷訳語』の「捏怯来書」によって見ると、「アリク・ブガの子孫イエスデルらは、

オイラットと共に叛いて、我等のハーンを弑し奉り、大宝を奪って、人民をことごとく殺害するので」とある。「大宝を奪って yeke tamya-yi abču」の一句が示す通り、この時アリク・ブガ家のイエスデルは、オイラットの支持のもとに、フビライ家に代ってモンゴルのハーン位に即いたのである。元朝初め、アリク・ブガ家がフビライに降ってから一百二十四年後のことであった¹²⁾。

イエスデルは1391年に死んで、その子エンケ・ハーン(Engke qayan)が後を継いだという¹³⁾。しかしこの頃からモンゴル史は暗黒時代に入り、帝室の家系などもよくわからなくなる。明側史料には断片的な事柄しか伝わらなかったし、モンゴル人が自分たちの祖先の系譜や伝承を書き留めたのは三世紀も後の十七世紀に入ってからであった。

第二節 史料の性格とその時代

我々が現在元朝崩壊後のモンゴル史を再構築する時、史料として利用し得るモンゴル年代記のうち最も早くに著されたものは、オルドス(Ordos)の年代記『エルデニイン・トブチ』(Erdeni-yin tobči)即ち『蒙古源流』である¹⁴⁾。これはオルドスのウーシン(Ügüsin)

10) 岡田 1981, pp. 187-190.

11) 『明代満蒙史料』1, p. 204.

實録洪武二十一年冬十月丙午の条

初虜主脱古思帖木兒在捕魚兒海，爲我師所敗，率其餘衆，欲還和林，依丞相咬住。行至土刺河，爲也速迭兒所襲擊，其衆潰散，獨與捏怯来等十六騎遁去。適遇丞相咬住・太尉馬兒哈咱領三千人來迎，又以闊闊帖木兒人馬衆多，欲往依之，會天大雪，三日不得發。也速迭兒遣大王火兒忽答孫・王府官孛羅追襲之，獲脱古思帖木兒，以弓絃縊殺之，并殺其太子天保奴。故捏怯来等恥事之，遂率其來降。和田 1959, p. 182. 岡田 1974, pp. 8-9.

12) 和田 1959, p. 183. 岡田 1974, p. 9.

13) 十七世紀に著されたモンゴル年代記ロブサンダンジン国師の『アルタン・トブチ』は、イエスデルをジョリクト・ハーン(Joriyту qayan)という諡名で呼び、その治世を1388-91年とする。同じく『アルタン・トブチ』によると、イエスデルの次に立ったハーンはエンケである。ここに、エンケとほとんど同時代の人、ティームール(Timūr)の孫ウルク・ベグ(Uluy Beg) —1394生-1449歿—が著したと言われる『四ウルス史(Tārikh-i ulūs-i arba'a)』がある。現物は残存しないが、ベチ・ド・ラ・クロワの『大チンギス・ハーン史』(Pétis de la Croix, Histoire du Grand Genghizcan. Paris, 1710. pp. 515-516)は恐らく『四ウルス史』によってトクズテムル(Tocatmur)の次に Bisourdar が立ち、次いでその子 Ayké が立ったと記述した。Bisourdar はイエスデル(Yesüder)の訛で Ayké がエンケ(Engke)であることは確実である。(岡田 1966b, p. 5, 1974, p. 9. Honda 1958, pp. 234-238.)

14) これ以前に、明代に撰述されたことが確かであるオルドスのチンギス・ハーンの靈廟、いわゆる八白室(Naiman çayan ger)の祭祀の起源を説いた『チャガーン・テウケ』(Çayan teüke)があるが、これは専ら祭祀に関する記述のみで出来ており、ここで述べるような狭義の史料ではない。

部長サガン・セチェン皇太子 (Sayang sečen qong tayiji) が1662 (康熙元) 年に撰じたもので、あらゆる事項に干支紀年が付されていることを特徴とする¹⁵⁾。

次いでトメト (Tümed) の年代記、ロブサンダンジン国師 (Blo bzang bstan 'dzin kemegdekü guusi) の著『アルタン・トブチ』 (Altan tobči) がある。成立年代は不明であるが、内容から見て1669 (康熙八) 年以後のもので、1675 (康熙十四) 年のブルニ (Burni) の乱においてモンゴルの宗家チャハル (Čaḡar) が清朝に滅ぼされた事件に衝撃を受けて作られたのではないかと考えられている¹⁶⁾。

十七、十八世紀に数多くのモンゴル年代記が一斉に著された理由は、異民族である満洲人を自分たちのハーンに推戴することになったモンゴル人が、自己の文化遺産をもう一度見直し、それまで伝えられた祖先の系譜や伝承をここで整理して書き留めようとしたからである。1634年内モンゴルが満洲族の支配下に入った時点で、元朝崩壊後三百年近く続いた北元時代は終わったのであった。

上記二種の年代記『エルデニイン・トブチ』と『アルタン・トブチ』は十七世紀清朝治下の内モンゴルで書かれたものであるが、これらに次いで古いのが、この時期にはまだ清朝の直接支配を受けていなかった外モンゴルで著された『アサラクチ・ネレット・テウケ』 (Asarayči neretü teüke) である¹⁷⁾。これは

1677 (康熙十六) 年に、外モンゴル・ハルハ部の王公ジャンバ・エルケ・ダイチン (Byamba erke dayičing) が撰じたもので、後半部分にはダヤン・ハーン (Dayan qaḡan) の第十一子ゲレセンジェ (Geresenje) を祖とする七世代、一千一百余人に亙る外モンゴル・ハルハ部の王公の系譜が記されている。後代の清朝文献には同じ七世代のハルハ部王公二百七十余人の名が残るのみであるから、この『アサラクチ・ネレット・テウケ』が十七世紀清朝帰属に至る動乱期のハルハ情勢を解明する鍵となる一等史料であることが明らかである。

この他のモンゴル年代記は十八世紀以降に編纂されたものである。重要なものを以下に挙げる。

内モンゴル、右翼のハラチン系の『蒙古世系譜』 (Mongḡol borjigid oboḡ-un teüke)。これは1735 (雍正十三) 年に元来満洲語で書かれたものであるが、現存するのは1839 (道光十九) 年のモンゴル訳と1934 (民国二十三) 年の漢訳本のみである¹⁸⁾。

内モンゴルの左翼チャハルの『ガンガイヌ・ウルスハル』 (Gangga-yin urusqal) は、1725 (雍正三) 年にチャハルの別部ウジュムチン (Üjümüčin) のゴンボジャブ (Gombobjab) が撰じた¹⁹⁾。

内ハルハの年代記には二つあって、一つは『アルタン・クルドゥン・ミンガン・ケゲスト・ピチク』 (Altan kürdün mingḡan ke-

- 15) モンゴル文『蒙古源流』諸本については、宮脇 1980, pp. 148-149. 注1) 参照。本文ではいわゆるウルガ本=Haenisch 1955. と、これを基礎として異本と校合した Nasunbaljur 1958. を使用する。満漢訳文『蒙古源流』は誤りが多く、ウルガ本からの完全な邦訳は未だなされていない。重要箇所の部分訳は、岡田 1966b. にあり、全体の記載事項と干支紀年を示した年表は、岡田 1962. にある。
- 16) 『アルタン・トブチ』の終り近く、チャハルのブルニがブルニ王 (Burni Vang) として登場する。(Mostaert & Cleaves 1952, p. 185.)。清朝実録によるとブルニが父アブナイから親王の位を受け継いだのは康熙八 (1669) 年九月己未のことであるから、『アルタン・トブチ』の成立年代はこれ以後でなくてはならない。1675年のブルニの乱以後であるという説は、1967年7月に開催された第四回野尻湖クリルタイにおける岡田英弘の発表による。(岡田 1967, p. 19.)
- 17) Paringlai (ed.) 1960. の題名は『アサラクチ・ネレットイン・テウケ』(慈氏と名づくるもの史) であるが、岡田は『アサラクチ・ネレット・テウケ』(慈氏と名づくる史) の方が本文に沿った正しい題名であるとする。本書に関する紹介も合わせて岡田 1965a. 参照。
- 18) Heissig & Bawden 1957.
- 19) Пучковский 1960.

gesütü biçig) で、1739 (乾隆四) 年ジャールト (Jarud) 部のシレゲト国師ダルマ (Siregetü guusi dharma) が撰した²⁰⁾。他は『ボロル・エリケ』(Bolor erike) で、1775 (乾隆四十) 年にバーリン (Bayarin) 部のラシプンスク (Rasipungsux) が撰した²¹⁾。

外モンゴル・ハルハの年代記と思われる『ジャラグスン・フリム』(Jalagusun-un qurim) は撰人も成立年次も記されていないが、内容から見て十八世紀初めの撰²²⁾。これに多量の書き足しが行なわれているやはり無名氏撰の『シラ・トージ』(Sira tuquji) は1703-1706年頃の成立ではないかと思われる²³⁾。

以上のモンゴル年代記は、紀年でも記事の内容でも三系統に分類できる。『蒙古源流』、『アルタン・トブチ』、『ガンガイン・ウルスハル』がそれぞれの系統を代表するが、今仮にこれらをオルドス系、トメト系、チャハル系と名づければ、『アサラクチ・ネレト・テウケ』はトメト系、『蒙古世系譜』はトメト、オルドス両系の影響を受けており、『ジャラグスン・フリム』はオルドス系の所伝に従っている。また内ハルハの年代記はチャハル系に属している²⁴⁾。

オイラットにおける年代記の成立は、モンゴルに比べて一世紀近く新しくなるが、これはオイラット社会が異民族の圧迫を受け、その支配下で変貌を遂げる時期がモンゴルに比べて一世紀遅れたからに他ならない。

現在利用できるオイラットの年代記で最も古いのは、ヴォルガ・カルムックのトルグート (Toroγoud < Turγaxud) 部のエムチ・ガワンシャラブ (Emči Gabang šes rab) が1737年に書いた『四オイラット史』(Dörbön

oyirodiyın töuke) である²⁵⁾。次いで同じくヴォルガ・カルムックのホシュート (Xošüd < Qosixud) 部のバートル・ウバシ・トゥメン (Batur ubaši tümen) が1819年に書いた『四オイラット史』がある²⁶⁾。年代記としてはこの二種の右に出るものはないが、オイラット語史料としては、他に、1599年にオイラットに生まれてチベットで修業を積み、十七世紀のオイラット史上非常に大きな役割を演じた高僧ザヤ・パンディタの伝記 (Rabjamba jay-a bandida-yin tuquji) が同時代の一等史料として存在する²⁷⁾。また、成立年代は後代と思われるが、オイラットの文学作品として著名な『ウバシ・ホンタイジ伝』(Mongγoliyin ubaši xun tayižiyin tuuzi oršiboi) も、十七世紀のモンゴル・オイラット関係を研究する時欠くことのできない史料である²⁸⁾。

さて、以上が主なモンゴル語史料であるが、これと同様にモンゴル史研究に不可欠な漢文文献の成立年代についても予め留意しておかねばならない。我々がモンゴル史を研究する際利用する漢文文献には、実は全く性質の異なる二種類の史料が存在する。第一は実録、方略の類で、これには朝貢や戦闘のような、モンゴル人が時の中国政府と接触を持った事柄のみが、しかし正確な日付を伴って記録されており、同時代史料として第一級のものである。ただこれらから、当該時代のモンゴル社会の内部構造やモンゴル人相互の権力関係等を推察することはほとんどできない。

第二は、モンゴル各部が中国、つまり満洲族の建てた清朝に降った後、中国側がモンゴル人から情報を集め、これに実録・方略等の記述を合わせて編纂した歴史書の類である。

20) Heissig 1958.

21) Mostaert & Cleaves 1959.

22) Heissig 1959.

23) Шастина 1957.

24) これら各種のモンゴル年代記については、岡田 1965b, pp. 19-26. に詳しい。

25) Rincen 1967.

26) Позднеев 1915.

27) Ratnabhadra 1959.

28) Damdinsürüng 1959.

これらはまとまっており読み易く、しかも漢文だけでモンゴル史の大概が理解できるため、従来広く利用されてきた。しかしこれらすべてが後代の編纂物であるため、主要な事件や人物等が整理されすぎていて疑わしいことが多く、注意が必要である。

『欽定西域同文志』編纂の命が下ったのが1763（乾隆二十八）年のことで、清朝がオイラットのジューン・ガル（準噶爾）部を征服し終わった後のことであった。これは、西域の地名・人名辞典とでも言うべきもので、初め『平定準噶爾方略』——1755（乾隆二十）年着手、1772（乾隆三十七）年完成——編纂の参考資料として作られたものであったらしい。これがオイラットに関する中国の編纂物の中で最も早く著されたものである²⁹⁾。

『欽定外蕃蒙古回部王公表伝』が編纂されたのが1788（乾隆五十三）年、祁韻士が『皇朝藩部要略』を著したのが1839（道光十九）年のことであり、『蒙古游牧記』はさらに時代が下って1859（咸豊九）年の作である。これらは外モンゴル・ハルハ部が清朝に服属した時点からでもすでに一世紀以上も経過した後編纂されたものである。当時すでにモンゴルの牧地には清朝の命によって細かく境界が設置され、十七世紀以前の遊牧生活は想像することすら不可能になっていたことに留意せねばならない。

第三節 十四世紀末から十五世紀中葉まで

さて、以上に挙げたような十七世紀以降の編纂史料によって、我々は十四世紀末まで溯ってモンゴル史を再構築せねばならないのである。先に第一節では、1388年にアリク・ブガ家のイエスデルが、オイラットの支持のもとにフビライ家に代わってモンゴルのハーン

位に即き、1391年イエスデルが死ぬと、その子エンケ・ハーンが後を継いだところまで述べた。種々のモンゴル年代記は一致して、エンケの次のエルベク・ハーン (Elbeg qaγan) の治世にモンゴルとオイラットの分裂・対立が起こったと伝えている。しかしこのエルベクの出自については詳かでない。また、これ以降1433年にオイラットのトゴン (Toγon) に戴かれて帝位に即いたトクトア・ブハ (Toγtoγa buqa) に至る数代のハーンの系譜は年代記間の異同が激しく、その血統関係についてもモンゴル年代記の記述を信用することはできない³⁰⁾。

オイラットのトゴンの息子エセン太師 (Esen tayisi) は1452年トクトア・ブハを殺し、翌年自ら大元天聖大ハーンの位に登ったが、1454年部下の反乱で殺された。エセンは元朝の皇族を皆殺しにし、オイラット人を母とする者のみが助命されたという³¹⁾。事実のほどは明らかではないが、エセンの時代にモンゴル社会は大混乱に陥り、文書や系譜の類も多く失われたことは想像可能である。なぜなら、モンゴル年代記にはこれ以前の時代に就いて記すことが甚だ少なく、現存の系譜はどの部族でもすべてエセンの同時代人が実際上の始祖になっているからである³²⁾。このような訳で、エセンに至るモンゴルとオイラットの対立・抗争史について我々は完全に解明できるわけではない。しかしかなりの推量が可能である。

モンゴル年代記によると、エルベク・ハーン（在位1394-99）はオイラットのゴオハイ太尉 (Гооqai tayiu) の甘言にのって、『蒙古源流』によると弟、『アルタン・トブチ』によると自分の子であるハルグチュク皇太子 (Qarγučuγ qong tayiji) の妃オルジェイト

29) 『西域同文志』研究篇 1964, pp. i-xxvii.

30) 岡田 1966b, pp. 2-8 では三系統のモンゴル年代記各々の伝えるハーン名を列記し、各所伝の信憑性について詳細な考証が為されているが、トクトア・ブハ以前の系譜は後世の造作であるというのが氏の結論である。岡田 1966a, pp. 40-48. も参照。

31) 岡田 1981, p. 195. 和田 1959, pp. 342-343.

32) 岡田 1966b, p. 2, 1981, p. 195.

皇グワ妃子 (Öljejitü qong γuua biiji) の美貌に横恋慕し、ハルグチュクを殺して自分の嫁オルジェイトを娶った。オルジェイト妃子はゴオハイ太尉を欺いて酒に酔わせ、自分に乱暴を働こうとしたと偽ってハーンにゴオハイを殺させた。その後エルベク・ハーンは、ゴオハイの子バトラ丞相 (Batula čingsang) と、同じくオイラットのオゲチ・ハシハ (Ögeči qašq-a) の二人に殺されたという³³⁾。

このモンゴル年代記の伝えるエルベク・ハーン横死の前年である1398年、実際に太子オグラン (Tayzi-Oghlan) なる人物がハーンに叛いてカルムック (Qalmuq) から逃れ、カプルのティームールの宮廷に達したとザファル・ナーマの著者シャラフ・アル・ディーン・ヤズディー (Sharaf al-dīn Yazdī) は述べている。ザファル・ナーマは更に1405年ティームールの急死後太子オグランはカルムックに逃れ、そこでハーンとなったが数日後に殺されたと伝える³⁴⁾。

『蒙古源流』によるとエルベク・ハーンの次のハーンはクン・テムル (Kün temür) で、1399-1402 年在位であった。これは明実録に拠っても裏付けられる。しかも西方ティームール朝史料——ウルグ・ベグの『四ウルス史』によつたらしい『シャジャラト・ウル・アトラーク』——では、このクン・テムルを先にエルベク・ハーンに殺されたというハルグチュクの別名であるトゥラン・ティムル (Tūrān Tīmūr < Dügüreng temür) と呼び、この後大位は再びチンギス・ハーンの他の子孫の手に移ったと注記しているのである³⁵⁾。よってここでは、イエスデルからクン・テムルに及

ぶ四代のハーンはアリク・ブガ家出身で、オイラットが彼等を擁立し生殺与奪の権利を握っていたと考えておこう。

『明太宗実録』によると、クン・テムルの次のハーンは鬼力赤で、『シャジャラト』はこれに当るハーンをウルク・ティムル (Uruk Tīmūr < Örüg temür) と呼ぶ。彼は1403-1408 年在位で、『明太宗実録』によると部下の重臣アルクタイ (Aruxtai 阿魯台) とともに絶えずオイラットと戦ったという。明の成祖は1403年自らの即位を通告するのに、一方ではこのオルク・テムル (鬼力赤) ・ハーンとアルクタイ等に、他方ではオイラットのマハムード (Mahmūd 馬哈木), タイピン (Tayiping 太平), バト・ボロト (Batu bolod 把秃孛羅) に別々に使者を送っている。つまり明らかにこの時代モンゴルとオイラットは分裂しており、オイラットには首領が三人存在するのである³⁶⁾。

同じく『明太宗実録』によると、1408年、プンヤシュリー (Puñyaśrī 本雅失里) なる皇子がサマルカンドからベシュバリク経由でモンゴルに帰ると、オルク・テムル (鬼力赤) は部下に廢位されて殺され、アルクタイはプンヤシュリーを迎立して、協力してオイラットに対抗するようになったという。このプンヤシュリーをモンゴル年代記はオルジェイ・テムル (Öljei temür) と呼ぶ。『ザファル・ナーマ』の言う太子オグランとはこのプンヤシュリーのことである³⁷⁾。

プンヤシュリーは1410年、明の成祖の親征軍に撃破されて西奔し、1412年に至ってオイラットのマハムードらから、プンヤシュリー

33) この興味深い物語については、岡田 1966b, pp. 9-14. にモンゴル語からの全訳がある。

34) Minorsky 1963, pp. 50-51. 岡田 1966b, pp. 6-7.

35) Honda 1958, pp. 238-239. 岡田 1974, p. 10.

36) 『明実録抄』1, pp. 270-271, 275. 岡田 1974, p. 11.

37) Honda 1958, pp. 243-244. このプンヤシュリー即ちオルジェイ・テムルは『シャジャラト』によるとアリク・ブガの子孫である。これら一連の事柄を岡田は次のように説明する。オルジェイ・テムルはエルベク・ハーンの子で、オイラットの実権が強大になり過ぎたので出奔し、その後オイラットがエルベクを殺してクン・テムルを擁立したのであろう。そうした因縁からすれば、オルジェイ・テムルがアリク・ブガ家の出身でありながら、北元の遺臣のアルクタイと手を組んで、父の仇のオイラットに敵対した事情もよく分る。(岡田 1974, p. 12.)

を滅して伝国の疆を獲た旨明廷に報告があった。そして1413年、オイラットがダルバク (Dalbag 荅里巴) なる人を立てて主となしたことが明に聞えた。このダルバクは、『シャジャラト』等によってアリク・ブガ家出身と推定でき、オイラットの三首領、マハムード、タイピン、バト・ボロトは連合してダルバク・ハーンを戴いていたと『明太宗実録』は伝える。ダルバクはモンゴル年代記によると1415年に死に、1416年マハムードも死んで、その子トゴンが後を継いだ。ダルバク・ハーンの次のオイラダイ (Oyiradai) もやはりアリク・ブガの後裔で、オイラットが擁立したのであった³⁸⁾。

一方1412年にプンヤシュリーがオイラットに滅された後、モンゴル側のアルクタイは別のハーンを奉じていたらしい。1423年アルクタイがその主を殺したと『明太宗実録』は伝えているのである³⁹⁾。その後アルクタイは、先のオルク・テムル (鬼力赤) の子アダイ (Adai) をハーンに推戴した。アダイの在位年は『アルタン・トブチ』によると1425-1438年である。『シャジャラト』はこのオルク・テムルとアダイをオゴデイ家の人としている⁴⁰⁾。

1431年オイラットのトゴンはこのアダイとアルクタイを大いに破り、その本拠であったケルレン河流域を奪った。トクトア・ブハは最初アルクタイらと共にオルク・テムル・ハーンの部下の重臣であったが、オルク・テムルが殺されてオルジェイ・テムル即ちプンヤシュリーが即位すると、1409年明に来帰して甘肅辺外のエジネに止まったのであった。トゴンはこのトクトア・ブハを呼び戻して1433年モンゴルのハーンに推戴した。アルクタイは1434年トゴンの手で滅され、アダイ・ハーンは1438年にトクトア・ブハ・ハーンに滅さ

れた。これと前後してタイピン、バト・ボロトもトゴンに併合されたから、ここに実質的にはトゴンによる統一が完成したわけだが、それでもケルレン河以東のモンゴルの故土はトクトア・ブハ・ハーンの統治に委ねられたという⁴¹⁾。

以上を整理すると、イエスデルから四代目のクン・テムルまで、即ち1388年から1402年まで北元にはオイラットに擁立されたアリク・ブガ家出身のハーンが立っていた。ところが1403年ハーン位に即いたオルク・テムルはアリク・ブガ家出身ではなく、オイラットはこれに対抗して再びアリク・ブガ家出身のハーンを擁立しようとしたことがわかる。

先に、エセンの時代にモンゴル社会は大混乱に陥り、文書や系譜の類も多く失われたようであると述べた。トクトア・ブハ以前のモンゴル・ハーンの系譜は後世の造作に相違ないのである。十七世紀のモンゴル年代記作者たちは、自分たちの祖先でありかつチンギス・ハーンの後裔であるモンゴルのハーンたちを、あたかも一系列であったかの如くに整理してしまっているが、実際にはオイラットが推すハーンと、狭義のモンゴルつまり元の遺臣たちが推すハーンが同時に並び立っていた期間が存在した。

オイラットのマハムードは、1412年オルジェイ・テムルを滅して伝国の疆を得たと明廷に報告したが、その後も元の遺臣のアルクタイは別のハーンを奉じていた。最後にアルクタイはオイラットのトゴンに滅され、アルクタイの擁立したアダイ・ハーンはもう一人のハーン、トクトア・ブハに滅されてモンゴルは統一されたかに見えた。ところが、トゴンの息子エセンがトクトア・ブハを殺し、自らも部下に殺されるとモンゴルは再び分裂し、これ以後元朝の本来の後裔である東モンゴル

38) 『明実録抄』1, pp. 416, 426. 岡田 1974, pp. 12-13.

39) 『明実録抄』1, p. 541. Honda 1958, pp. 240-246.

40) Honda 1958, pp. 240-246. 岡田 1974, pp. 11-13.

41) 岡田 1974, pp. 12-13. 詳細は和田 1959, pp. 151-423. 「兀良哈三衛に関する研究上・下」参照のこと。

と、四オイラットと呼ばれる西モンゴルは事実上二度と統一されることはなかった。

第三章 遊牧諸集団の構造

第一節 ドルベン・オイラット

種々のモンゴル年代記の作者たちは、元朝崩壊後の自己の歴史を描く時、一様にモンゴルとオイラットの対立・抗争を主軸にして物語る。もちろん、これは十七世紀という時代の産物ではないかという懸念が存するのではあるが、年代記中必ず「四十モンゴル、四オイラット、二つ」(döčin Mongγol, dörben Oyirad qoyar)と対比され、オイラットは「ハリ(qari)」即ち異族と呼ばれる。ではオイラットとは一体どう定義されるべきものであったのだろうか。なぜモンゴルとオイラット二つが存在し、或いはモンゴルが二つに分裂したのであろうか。

すでに第二章第一節で述べたように、十三世紀初めオイラットなる部族はモンゴル族であるが少し異なるモンゴル語を話し、人口が多く、いくつもの部に分かれていたという。

十三世紀中葉アリク・ブガとフビライが争った時、オイラットはアリク・ブガの側に立ち、フビライ軍に粉碎された。

元朝崩壊後十四世紀末にアリク・ブガの子孫がフビライ家最後のハーンを倒して新王朝を樹立した時、これを助けたのもまたオイラットであったが、彼等がかつてのオイラット部族に他部族を加えた連合体に変わっていたと思われる。

連合体となつて再び歴史舞台上に登場したこの新しいオイラットの構成要素がどのようなものであったかは、1737年に書かれたエムチ・ガワンシャラブの『四(ドルベン)オイラット史』や、1776年出版のパラスの『モンゴル民族史料集』⁴²⁾、『蒙古源流』や『シラ・トージ』等のモンゴル年代記によって、分析・

解明が可能なのである。

ガワンシャラブの『四オイラット史』は、オイラットに属した九つの集団名を挙げ、それを四つのグループに分けている。それは、自分たちを「四オイラット」と言うからには四つの部分から成っていなければならないと、オイラットの人々自身が考えたからであろう。その九つの集団とは、

- (I) オーロト (Ölöd<Ögeled)
- (II) ホイト (Xoyid<Qoyid)
バートト (Bätud<Bayatud)
- (III) バルグ (Baryu)
ブリヤート (Buräd<Buriyad)
- (IV) ドルベト (Dörböd<Dörbed)
ジューン・ガル
(Žöün γar<Jegün γar)
ホシュート (Xošöd<Qosigud)
トルグート (Toroyoud<Turγayud)

である。1819年のバートル・ウバシ・トゥメンの『四オイラット史』では、分類は同じながら、トルグートのところにトゥメト(Tümed)を入れ、トルグートを別扱いにしている⁴³⁾。

まず最初のオーロトであるが、ガワンシャラブは「オーロトは、黄魔(šara šumu)にそそのかされて遷り去った」と言い、また「オーロトはハザルバシ(Xažalbaš)氏となって離散した」と言う。バートル・ウバシ・トゥメンも「オーロト、これらを、黄魔(šara šuman)にそそのかされてオイラットからあてもなく去ったので、オーロトと名づけたのであった。オーロトはハザルバシに入った」と言い、『シラ・トージ』もまた「オーロトは今はサルギス(Sargis)というウルスになった」と記している。以上から判断して、オーロトがオイラットから分離したのはよほど大昔のことであつたらしい。それ以上何も明らかではないが、少なくとも十七世紀のロシア外交文書中には、オーロトと呼ばれる部族が

42) Pallas 1776.

43) 岡田 1974, pp. 16-17. 本文中のこれ以後のオイラット諸集団の分析はすべて同論文に拠る。

四オイラットに属した形跡は全く見られない。

さてオーロト以外の集団であるが、まず二つの『四オイラット史』が(II)グループとするホイトとバートトについて考えてみよう。『シラ・トージ』は「ホイトの首領たちは、イナルチ・トロルチ（これは、チンギス・ハーンの時代のオイラット諸王の一人クトカ・ベキの二人の息子の名である）の後裔である」と言う。またパラスはこう記している。「ホイト人の言うところによると、バートトというのは、かれらの勇猛の故に中国人が与えた尊称である」と。つまり、ホイトとバートトは本来のオイラットの後裔であると言うことができよう。

次にバルグとブリヤート、そしてトゥメトを考えてみよう。ラシード・ウッディーンの「部族篇」によれば、十三世紀には、バイカル湖東のバルグジン・トクム地方にはバルグト(Баргут)、コリ(Кори)、トラス(Тулас)の三部族があつてバルグトと総称され、また湖西にはバルグトの分れのトマト(Тумат)部族があつてキルギスに接していた。オイラットの住地である今のトゥワがトマトの故居と言われていたことについては、第二章で触れた。

十七世紀のシベリアに進出したロシア人は、アンガラ河を溯り、1629年、オカ河口の今のブラツク(Братск)の地において初めてブリヤート人と接触した。この方面は昔トマト人の住地だったところであつて、つまりトマト、ホリ(コリ)などがブリヤートになつたのである。

なおバートル・ウバシ・トゥメンが挙げているトゥメトは、オイラットの先住民族と伝えられたトマトを指すようである。パラスに「トゥメト(Tümmüt)またはトマト(Tummut)は、黄魔(Scharaschulma)に誘われて他のオイラットから離れ去つた」とオーロトと同様の伝説を記しているのがその証拠である。そう言うわけで、バルグとブリヤートは、ともに昔のバルグト(Barjud)に由来するので

ある。

次にドルベトとジューン・ガルについて、ガワンシャラブは言う。「ドルベト、ジューン・ガルの一族は天から出たという。その故は、瘤のある樹に小さな幼児が居たのを狩人が見つけて取つた。樹の形が管(čorygo)状なので、チョロース(Čorōs)と言つた。……後略」パラスはさらに詳しくこの始祖説話を述べるが、これが天山ウイグル王国の始祖伝説とそっくりなのである。840年にキルギズの侵入で崩壊したウイグル帝国の分支は、天山ウイグルだけでなく、陰山のオングトや甘粛に入って西夏王国に吸収されたものもあるが、その住地から考えてやはりウイグル帝国の片割れと推定されるナイマン(Naiman)こそが、ドルベトとジューン・ガル共通の前身であろう。ナイマンは、のちの四オイラットの中心の聖山と仰がれたボグド・オーラ山のあるアルタイ山脈の東西から、東はハンガイ山脈の南面にかけて広がっていた。またドルベトとジューン・ガルの首領たちは、系譜によってトゴン、エセン父子の後裔であることが明らかである。

次なるホシュートは、四オイラットに属する集団の中で唯一つ、チンギス・ハーンが大興安嶺方面に封じた左翼万戸の後身である。ホシュートの首領の家系が、チンギス・ハーンと同母弟ジョチ・ハサルから出ることについては、すべての史料が全く一致している。もっとも、四種の系譜とも、ハブト・ハサル(即ちジョチ・ハサル)からアクサガルダイに至る最初の七代だけ一致しており、実はこの部分は、ハサルの子孫としては本家の、モンゴルのホルチンの系譜から借りて来たものらしい。諸史料はアクサガルダイの子アルク・テムルの弟として、よく似た名のオルク・テムルを挿入し、ここからホシュートの系譜を続けているのである。しかし、ホシュートが左翼万戸の後身であることは確かであつて、ホシュートを一にオジエト(Öjijed)とも呼ぶことから裏付けられる。オジエトは、明

人の言うウリャンハ（兀良哈）三衛のモンゴル名だからである⁴⁴⁾。

その三衛がオイラットの傘下に入ったのは、先に述べたトゴンとクトア・ブハ・ハーンがアルクタイを滅した1434年からのことで、トゴンは三衛を誘って、はるか西方の独石、宣府、大同、延安、綏徳の明辺に侵寇せしめたが、その子エセンの時には五原の方面や、さらにエジネの西方にまで三衛の衆を移住せしめたい。エセンの死後、その一部は放回されたが、恐らく大きな集団がオイラットに残ったのであろう。ガワンシャラブは、オロク・トモルがはじめてトゴン太師に仕えたと言い、また「ホシュートという名は、トゴン太師が与えたものである」と言う。同じことをパラスは、トゴンの孫の治世にブルガリ・ハーン (Bulgari Chan) との戦に功を立ててこの名を受けたとする。いずれにせよ、ホシュートがオイラットに加わったのは十五世紀中葉であったことが明らかである。

最後のトルグートであるが、ガワンシャラブは次のように言う。「アルダル・カプチュのお言葉に『トルグートがワン・ハーンから出たことはモンゴルの書にあるぞ』と書かれているので記さなかった。」ワン・ハーンとは、ケレイト (Kereyid) のオン・ハーン (Ongqan) のことである。『シラ・トージ』も、「トルグートというものは、ケレイトのオン・ハーンの後裔である」と明言する。よって、トルグートがその昔のケレイト王国の遺民で

あることは論のないところである。

以上より、十六、七世紀に実際にドルベン(四)・オイラットを構成していた集団を整理すると、

- (I) 旧オイラット系のホイトとバートト、
- (II) バルグト系のバルグとブリヤート、
- (III) ナイマン系のドルベトとジューン・ガル、
- (IV) ケレイト系のトルグート

以上に、東モンゴルの三衛系のホシュートが、加わったものであったことがわかる。

これら四系統の十三世紀の分布を考えてみると、イェニセイ上流を中心とするオイラット族の南に接して、アルタイ山脈を中心とするナイマン族が東はハンガイ山西まで広がり、その東に接してケレイト族がハンガイ山東からケンテイ山西に達し、さらにその北のバイカル湖を中心とするバルグト族が西に延びて、オイラット族と接していた。

これら元来の非モンゴル種族が、元朝崩壊後、フビライ家を奉ずる元の遺臣たち、即ち狭義のモンゴルに対抗して連合体を結成し、旧オイラットをその代表としてドルベン(四)・オイラットと呼ばれるようになったのであった⁴⁵⁾。

第二節 モンゴル

では、十七世紀のモンゴル年代記が述べる、オイラットに対するモンゴルとは如何なるものであったかを、次に考えてみよう。

44) 1389年に明の太祖が大興安嶺東の地に置いた三衛は、北から福餘衛、泰寧衛、朵顔衛であったが、これらのモンゴル名はそれぞれオジエト (Öjijed), オンリウト (Onglijud), ウリャンハン (Uriyangqan) であった。『武備志』227. は、福餘衛の土名を「我着」(オジョ)と記している。明人は三衛を、明に近い最も南の朵顔衛の本名に従ってウリャンハ「兀良哈」三衛と呼んだが、モンゴル人はやはり自分たちに近い最も北の福餘衛をもって三衛を代表せしめ、これを「山前の六千オジエト」(ölgeyin jürγuγan mingγan Öjijed)と呼んだのである。(岡田 1974, p. 35.)

45) 岡田は次のように結論づける。

1388年にイエスデルが、フビライ家を倒してアリク・ブガ家の新王朝を樹立したとき、オイラト、ナイマン、ケレイト、バルグトの西北の四大種族がその旗のもとに馳せ参じて連合体を結成し、これがアリク・ブガ家の外戚に因んでまたオイラトと呼ばれた。これがドルベン・オイラットの起源であったろう。オイラトの首領が、1400年のモンケ・テムル一人から、1403年のマハムード、タイピン、バト・ボロトの三人に変わったことは、この連合が十四世紀の終末に成立したことを暗示している。(岡田 1974, p. 39.)

1454年オイラットのエセン・ハーンが部下の反乱で殺されると、オイラットはモンゴルに対する影響力を失って、自分たちの本拠地である西北方に後退した。東南方ではモンゴル人が先ずトクトア・ブハの幼子マルコルギス (Markörgis), 次いでその異母兄モーラン (Muulan) をハーンに推戴したが、いずれも部下に殺され、十年近い空位時代のち、チャハル万户長マンドールン (Mandugulun) が即位する。しかしこれも内乱に倒れ、その死後はオルドス万户長ボルフ晋王 (Bolqu jinong) がハーンと称して活動したがこれも殺され、ようやくボルフ晋王の子ダヤン・ハーン (Dayan qaγan) になって、初めてモンゴル系の六万户の連合体が成立した⁴⁶⁾。

ダヤン・ハーンの六万户とは、左手のチャハル (Čaqar), ハルハ (Qalq-a), ウリヤンハン (Uriyangqan) と、右手のオルドス (Ordos), トゥメト (Tümed), ヨンシエブ (Yöngsiyebü) であったことは、各種のモンゴル年代記によって広く知られている⁴⁷⁾。実はこれらすべてがフビライ家と関係の深い元朝系の集団であったことが明らかなのである。

チャハル万户は、フビライが兄モンケ・ハーンから与えられた京兆の所領の後身である。つまり、これは本来甘粛に遊牧していたフビライ直轄の部族で、フビライ・ハーン即位後、その子安西王の系統に相続された。安西王管下の甘州でトルイの妻でありフビライの母であるソルククタニ・ベキの霊が祀られていたことが知られ、『アルタン・トブチ』による

と、チャハルにおいてもこのソルククタニ・ベキ (エシ・ハトンと言う名で登場する) の霊が祀られていたという⁴⁸⁾。

ハルハ万户は、元の左翼五投下の系統で、ジャライル国王の所管の後身である。ダヤン・ハーンはハルハ万户に第五子アルジュボラト (Alju bolad) と第十一子ゲレセンジェ (Geresenje) を封じたが、アルジュボラトの所部は、その子フルハチ (Qurqači) の五子に因んで五オトク・ハルハとなり、ゲレセンジェの所部はその七子に因んで七オトク・ハルハとなった。『アサラクチ』『シラ・トージ』によると、ゲレセンジェは常に「ジャライルの皇太子」(ǰalayir-un qong tayiji) と呼ばれ、その長子アシハイ (Asiqai) の相続したオトクの一つはジャライルであった。一方五オトク・ハルハのフルハチの第三子が相続したオトクはフングラトであった。これは正にジャライル国王家がフングラト等を率いたのと合致する⁴⁹⁾。

ウリヤンハン万户は、ケンテイ山中のチンギス・ハーンの墓を守ったウリヤンハン千戸の後身であろう。

オルドス万户は、チンギス・ハーンの四大オルドの後身である。元朝時代チンギス・ハーンの四大オルドの領主は晋王であったが、後世のオルドス万户の長はジノン (jinong) 号を世襲し、チンギス・ハーンの八白室 (Naiman čaγan ger) を奉祀したことはよく知られている。ジノンが晋王の音訳であることは明らかである。しかしここで特記しておかね

46) このダヤン・ハーンの生歿年及び事業については不明な点が多く、史料の異同も激しいため、わが国においてかつて大論争が展開された。このいわゆるダヤン・ハーン論争については以前触れたことがあるのでここでは述べない。宮脇 1980, pp. 140-142. 参照。

47) 最も叙述の整った蒙古源流によると、次の如くである。(Haenisch 1955, p. 65-r, Nasunbaljur 1958, p. 211. 岡田 1975, p. 128.)

オルドスはチンギス・ハーン (ejen) の八白室を管理する、大いなる使命のあるウルスである。それに対してはウリヤンハン、同じチンギス・ハーンの御陵 (altan kömörgöi) を守護する、これまた大いなる使命のあるウルスが、ホルチン、アバガと共に当るがよい。十二トゥメト (arban qoyar Tümed) に対しては、十二オトク・ハルハ (arban qoyar otoγ Qalq-a) が当れ。広大なるヨンシエブに対しては、八オトク・チャハル (naiman otoγ Čaqar) が当り合え。

48) 岡田 1975, pp. 132-133.

49) 岡田 1975, pp. 134-135.

ばならないのは、1935年に八白室に参拝したオウエン・ラティモアの報告によると、祀られているのはチンギス・ハーン自身とハトン即ちボルテ・フジンと、左手のハトン即ちフラン・ハトンだけであり、これは大オールドと第二オールドのみが合併した痕跡をとどめているということである⁵⁰⁾。

トゥメト万户は、一名モンゴルジンとも言い、オングト王国の後身である。『蒙古源流』によると、ダヤン・ハーンと結婚したマンドフイ・ハトンは、トゥメトのエングト (Enggüd) の出身であると言い、またトゥメトは久しく陰山に拠った。この陰山はオングトの故地であり、エングトとはオングトのことである⁵¹⁾。

ヨンシエブ万户は、涼州に封ぜられたグェク・ハーンの弟ゴデンの所領の後身である。フビライが京兆に封ぜられると、ゴデンの子ジビク・テムルはフビライに臣属した。ジビク・テムルが建てた町を永昌府と言うが、ヨンシエブはその音訳であろう⁵²⁾。

これでダヤン・ハーンの六万户の起源が明らかとなったが、この他にもいわゆるモンゴルとして知られる部族に、オンリウト (Ongliγud)、ハラチン (Qaračin)、アスト (Asud)、三衛等がある。

オンリウトは、大興安嶺北部に封ぜられたチンギス・ハーンの弟たちの所領の後身の総称で、後の清代のホルチン (ジョチ・ハサルの系統)、オンニウト (ハチウンの系統)、アバガとアバガナル (ベルグテイの系統) を含む。

アストはカフカズ系のアラン人軍団の後身であり、ハラチンはトルコ系のキプチャク人軍団の後身であったが、これら両方とも元朝時代は皇帝直属の軍団であったことが知られている⁵³⁾。

最後の三衛であるが、彼等は1388年天元帝トクズ・テムルがアリク・ブガ家のイエスデルに殺された時明に投降した三部族である。その後アルクタイの支配下に入り、トクトア・ブハ・ハーンに属したことも知られる⁵⁴⁾。

以上によって、ダヤン・ハーンの六万户となった部族も、その他若干のものも含めて、モンゴルと称するものはすべて元朝の遺臣であったことが明らかである。元朝は即ちフビライ一族の王朝であった。歴史をさらに溯ると、1260-64年のアリク・ブガとフビライとの争いの際、フビライを積極的に支持したチンギス・ハーンの左翼万户とフビライ一族の所領の後身こそが、十七世紀のモンゴル年代記の言うところのモンゴルであったと言えよう。

第四章 十五世紀以後のモンゴル=オイラット関係

第一節 ハルハ部の成立

ダヤン・ハーンは、『蒙古源流』によると1467年のチャハル部族長マンドールン・ハーンの死後、その末亡人のマンドフイ・ハトンと結婚し、チャハル部族長の地位を獲得した。そして明史料の伝える1487年の父ボルフ・ジノンの歿後、即位してダヤン(大元)・ハーンと名のり、三十八年の治世中モンゴル各部再統一の事業を行なったのであった。

ダヤン・ハーンの六万户のうち、左翼のチャハル、ハルハ、ウリヤンハンハはハーンの直轄に帰し、ゴビ沙漠の東北に遊牧した。一方右翼のオールドス、トゥメト、ヨンシエブは、最終的にはダヤン・ハーンの第三子バルスボラト (Bars bolad) がジノンとなってこれを統治した。右翼は西南の方、中国の長城沿いに遊牧した⁵⁵⁾。

50) Lattimore 1941, pp. 31, 35-43. 岡田 1975, p. 134.

51) 岡田 1975, p. 134.

52) 岡田 1981, p. 197.

53) 岡田 1975, p. 135, 1981, pp. 197-198.

54) 岡田 1981, pp. 208-209.

55) Okada 1966, p. 69.

ダヤン・ハーンは生前から六万戸に諸子を封じたが、左翼のハルハ万戸には、第五子のアルジュボラトと末子ゲレセンジェが封ぜられた。ハルハの名は、現モンゴル人民共和国東隅を流れるハルハ河に由来するのであろう。このゲレセンジェこそ、後にオイラットを西北方に逐いやつて、外モンゴル一帯に住地を広げたいわゆる七旗ハルハの王公たちの始祖である。

そのハルハで1677年に書かれた年代記『アサラクチ・ネレト・テウケ』は、ゲレセンジェについてこう伝える。

六万戸の主、バトモンケ・ダヤン・ハーンの、六十の力ある息子たちの後は、ジミスケン・ハトンから生まれたゲレセンジェである。年は、癸酉（1513）の年生まれ。この七旗の主となった由来は、昔々ダヤン・ハーンのところにハルハのチノスのウダボラトという人が来て、「今、ハルハをジャライルの舎人たちが治めている。主となる汝の息子一人を与えてほしい」と請うた。全く同意して、ジミスケン・ハトンの長子ゲレボラトを与えた。連れて行って翌年に、ゲレボラトをハーンのところに連れて来て、「彼の気質は難しく、彼の力は大きいので、世話をした汝の臣下は後に罪に陥ることになる恐れがある」と言って引き渡して引き返す時、遊んでいるゲレセンジェを連れて

行った。そこでウダボラトは子供にして、オジエトのムングチェイ・ダルガの娘ハントハイ、メンドウの娘ムングイの二人を許嫁にし、それからハントハイを貰い受ける時、唯一頭の白駝とともに、黄羊の毛でできた袖のない長い礼服を彼女に着せて与えた。そこで、ウダボラトの息子トクタフはフェルトや木を集め、ささやかに所帯を持たせた⁵⁶⁾。

同じくハルハの年代記『シラ・トージ』は、この物語をさらに詳しく伝えている。

ゲレセンジェの七旗に坐した由来は、ダヤン・ハーンのところにチノスのウダ・ボラトが毎年野生の馬や驢馬を殺して乾したものを届けていた。ある時自分が行く時に、「臣等はジャライルとケルトの舎人たちが治めて暮らしていて、彼等に家を治めさせていた。今我がハーンである主から一人の息子を請うために私は来たのです」と申し上げれば、ハーンは同意してジミスケン・ハトンの長子ゲレ・ボラトを与えた。ウダ・ボラトは翌年ゲレ・ボラトをハーンのところに連れて行って申し上げるには、「主であるハーンの息子の力は大きい。長いいないハルハの性質は狂暴である。世話を受けた汝の臣下が今より後罪に陥ることを私は恐れる」と返して家に帰る時、遊んでいるゲレセンジェという名の子を連れて来た

56) Paringlai (ed.) 1960, p. 72.

ᠵᠢᠷᠴᠣᠬᠠᠨ ᠲᠦᠮᠡᠨ-ᠦ ᠶᠡᠭᠡᠨ ᠪᠠᠲᠤᠮᠣᠩᠭᠡ ᠳᠠᠶᠠᠨ ᠻᠠᠬᠠᠨ-ᠤ

ᠵᠢᠷᠠᠨ ᠶᠡᠷᠬᠡ ᠬᠣᠪᠡᠭᠦᠳ-ᠦᠨ ᠻᠣᠶᠢᠨᠠ:

ᠵᠢᠮᠢᠰᠬᠡᠨ ᠻᠠᠲᠤᠨ-ᠠᠴᠠ ᠲᠣᠷᠦᠭᠰᠡᠨ ᠭᠡᠷᠡᠰᠡᠨᠵᠡ ᠪᠢᠨ:

ᠵᠢᠯ ᠠᠨᠤ ᠡᠮᠡ ᠻᠠᠷᠠ ᠲᠠᠻᠢᠦ-ᠠ-ᠲᠠᠢ::

ᠡᠨᠡ ᠳᠣᠯᠣᠬᠠᠨ ᠻᠣᠰᠢᠬᠤᠨ-ᠤ ᠶᠡᠭᠡᠨ ᠪᠣᠯᠤᠬᠤᠰᠠᠨ ᠤᠴᠢᠷ ᠠᠨᠤ:

ᠡᠷᠲᠡ ᠤᠷᠢᠳᠠ ᠳᠠᠶᠠᠨ ᠻᠠᠬᠠᠨ-ᠳᠤᠷ ᠻᠠᠯᠻ-ᠠ-ᠶᠢᠨ ᠴᠢᠨᠣᠰᠤᠨ ᠤᠳᠤᠪᠠᠯᠠᠳ ᠨᠡᠷᠡᠲᠦ ᠬᠦᠮᠦᠨ ᠢᠷᠡᠵᠦ:

ᠡᠳᠦᠭᠡ ᠻᠠᠯᠻ-ᠠ-ᠶᠢ ᠵᠠᠯᠠᠶᠢᠷ-ᠤᠨ ᠰᠢᠭᠢᠵᠢᠨᠡᠮᠡᠳᠦᠵᠦ ᠶᠠᠪᠤᠨᠠᠮ:

ᠶᠡᠭᠡᠨ ᠪᠣᠯᠠᠨ ᠨᠢᠭᠡᠨ ᠬᠡᠴᠡᠨ-ᠢᠶᠡᠨ ᠠᠶᠤᠮᠦᠮᠦᠢ ᠬᠡᠮᠡᠨ ᠬᠦᠶᠤᠪᠠᠢ::

ᠠᠰᠤᠷᠠᠳᠠᠬᠤᠰᠠᠨ ᠻᠠᠷᠢᠻᠢᠳᠦᠵᠦ ᠵᠢᠮᠢᠰᠬᠡᠨ ᠻᠠᠲᠤᠨ-ᠤ ᠶᠡᠬᠡ ᠬᠣᠪᠡᠭᠦᠨ ᠭᠡᠷᠡᠪᠣᠯᠠᠳ-ᠢ ᠠᠭᠪᠡᠢ:

ᠠᠪᠴᠤ ᠣᠳᠤᠬᠠᠳ ᠻᠣᠶᠢᠲᠦ ᠵᠢᠯ-ᠳᠦᠷ ᠭᠡᠷᠡᠪᠣᠯᠠᠳ ᠻᠠᠬᠠᠨ-ᠳᠤᠷ ᠠᠴᠢᠷᠠᠵᠦ:

ᠠᠪᠤᠷᠢ ᠵᠠᠩ ᠢᠨᠤ ᠬᠦᠴᠢᠷ ᠡᠷᠬᠡ ᠶᠡᠬᠡ-ᠶᠢᠨ ᠲᠤᠯᠠᠳᠠ:

ᠠᠰᠠᠷᠠᠳᠠᠬᠤᠰᠠᠨ ᠠᠪᠠᠲᠤ ᠴᠢᠨᠤ ᠻᠣᠶᠢᠨᠠ ᠡᠷᠭᠦᠳᠦ ᠣᠷᠠᠻᠤ ᠪᠣᠯᠬᠦᠵᠠᠢ ᠬᠡᠮᠡᠵᠦ ᠠᠭᠢᠭᠦᠳᠡ::

ᠻᠠᠷᠢᠻᠢᠳᠦ-ᠳᠤᠷ-ᠢᠶᠠᠨ ᠨᠠᠬᠠᠳᠴᠦ ᠶᠠᠪᠤ-ᠻᠤ ᠭᠡᠷᠡᠰᠡᠨᠵᠡ-ᠶᠢ ᠠᠪᠤᠨ ᠠᠳᠪᠠᠢ: ᠲᠡᠳᠦᠢ ᠤᠳᠤᠪᠣᠯᠠᠳ ᠬᠣᠪᠡᠭᠦᠨᠴᠢᠯᠡᠨ ᠶᠠᠪᠦᠵᠦ:

ᠠᠳᠦᠶᠡᠳᠦ-ᠦᠨ ᠮᠣᠩᠭᠦᠴᠡᠢ ᠳᠠᠷᠤᠬᠠᠶᠢᠨ ᠠᠬᠢᠨ ᠻᠠᠩᠲᠤᠻᠠᠢ ᠮᠡᠨᠳᠦ-ᠶᠢᠨ ᠠᠬᠢᠨ ᠮᠣᠩᠭᠦᠢ ᠻᠣᠶᠠᠷ-ᠢ ᠰᠦᠢᠯᠡᠵᠦ: ᠲᠡᠨᠡᠳᠡᠴᠡ

ᠻᠠᠩᠲᠤᠻᠠᠢ-ᠶᠢ ᠪᠠᠬᠤᠯᠤᠻᠠᠻᠢ-ᠳᠤᠷ ᠬᠠᠬᠤᠴᠠ ᠴᠠᠬᠠᠨ ᠲᠡᠮᠡᠭᠡᠲᠡᠢ: ᠵᠡᠭᠡᠷᠡᠨ ᠤᠤᠵᠢ ᠡᠮᠦᠰᠡᠬᠡᠵᠦ ᠠᠭᠪᠡᠢ: ᠲᠡᠳᠡ ᠤᠳᠤᠪᠣᠯᠠᠳᠤᠨ

ᠬᠣᠪᠡᠭᠦᠨ ᠲᠣᠬᠲᠠᠻᠤ ᠢᠰᠡᠭᠡᠢ ᠮᠣᠳᠤᠨ ᠻᠤᠷᠢᠶᠠᠨ ᠠᠴᠦᠬᠡᠨ ᠭᠡᠷᠡᠭᠡᠯᠦᠪᠡᠢ::

なお、この部分の英訳は、Okada 1972, p. 70. にある。

のを知って、ハーンの側にいる大臣たちが言うには、「ハーンが世話をして自分の息子を賜れば、却って返してよこし、今どうして秘かに盗んで行くのだろうか。追って罰して下さい」と言えば、ハーンは「奴隷にして使うのではない。連れて行くがよい」と言って追わせなかった。ウダ・ボラトは息子として扱って、オジエトのムングジェイ・ダルガの娘のハトンハイという名のも、ウリャンハンのメンドウの娘のムングイという名のもの二人と婚約させて姻戚として、オジエトの娘を嫁に迎えるために連れて来る時に、白駝に乗せて黄羊の毛でできた袖のない長い礼服を着せて与えた。ウダ・ボラトの長子トクタフは、フェルトと木を集めて小さなゲルを組み立てて、家畜の乳をしぼって、ウダ・ボラトにとっては嫁にあたるために彼女のゲルには入らず、自分がしぼった乳を壁のすきまを通して外から与えて暮らしていた。

メンドウの娘をチャハルが奪って取ったのであった。そこでチャハルで一人の人と仲良くなって、「かつての私の婚約先は、ハルハのウダ・ボラトだった」とハルハに逃げて来れば、ウダ・ボラトはゲレセンジェに娶らせた。そこでゲレセンジェに別に嫁に取らせたのであった。大妃は右側の奥の方に寝て、小妃は左側に寝て暮らすうち、大妃が言うには、「汝等二人の互に楽しみ合い寝ているのを、私はどうして見ていられよう。私のゲルから出るがよい」と言った時、ゲルがなく外に寝ることになった。ウダ・ボラトは自分の小さなゲルに入らせて、一緒に食事をして暮らしている時、大妃がトクタフの外に来て言うには、「汝等は皆ムングイと一緒にになった。汝等から私はどうして離別してしまったのか」と大きな声で泣いた。ジャライル・ホン・タイジ（皇太子）がハルハの主となった有様は、このようであった⁵⁷⁾。

57) Шастина (ред.) 1957, pp. 107-109.

geresenje-yin doloḡan qosıḡun-du saḡuḡsan ućir inu:

dayan qaḡan-a ćinosun uda bolod ĵil būri taki ćikitei alaḡu qadaḡamal kūrġen aḡuḡu: nigen odaqui-daḡan qaraću kümün ĵalayir kerūd-ün sigĵiner medeĵü yabun: tedene ger medegül-ün bülüge. edüge qan eĵen-ećigen nigen köbegün ḡuyur-a irelüge bi kemen öćibesü: qaḡan ĵöbsiyeĵü ĵimisken qatun-u yeke köbegün gere bolad-i öġbei: uda bolad nöġüge ĵil gere bolad-i qaḡan-a abun odću öćirün:

eĵen qaḡan-u köbegün-ü

erke inu yeke:

eki ügei qalq-a-yin aburi inu doḡsin.

asaraḡdayḡsan albatu ćinu egün-eće qoina ereġüdü oroḡuĵai bi kemen öġcü ireküi-degen naḡadun yabuqu. geresenje neretü köbegün-i abću ireġsen-ü medeĵü qaḡan-u dergedeki tūsimed üġülerün: qaḡan asaraḡu köbegün-iyen soyurqabasu qarın qariḡulĵu öġġüged. edüge ećine yakin qulaḡaḡu odqu nekeĵü ĵasaḡlaydaqu kemebesü: qaḡan boḡolćılan ĵaruqu busu abću odtu-ḡai kemen ese nekeġülbei: uda bolad köbegün-ćilen yabuĵu öĵiyed-ün möngġüĵei daruḡ-a-yin ökin qatungqai neretei uriyaḡsan-u mendü-yin ökin möngġüi neretei qoyar-i qudaćılan sülleĵü: öĵiyed-ün ökin-i baḡulḡaḡu aćaraqui-dur ćaḡan temeġe aćıḡulĵu ĵegeren uḡuĵi emüskeĵü öġbe: uda bolod-un yeke köbegün toḡtaqu iseġei modun quriyaḡu öćüken ger gerlen mal saḡaḡu uda bolod-aća berileküi-yin tula gerte inu ülü oron: saḡaḡsan sün-iyen qana-yin nidü-ber ḡadana-aća öġġün yabubai: mendü-yin ökin-i ćaqar buliyaḡu abuḡsan aḡuḡu: tende ćaqar-tu nigen kümün-lüge qubtai boluḡad: erten-ü minu süitü qalq-a-yin uda bolod bülüge. kemen qalq-a-dur bosću irebesü uda bolod geresenje-dur abqa-ḡulba: tende geresenje-yi öbere baḡulḡaḡsan bülüge: yeke biĵiĵi baraxun qoyimar-a umtaḡu: baḡ-a biĵiĵi ĵegün teġe umtaḡu yabutala yeke biĵiĵi üġüler-ün: ta qoyar-un ĵirḡaldun kebekküi-yi bi ker üĵekü: minu gerte-eće ḡaruḡtun kemegsen-dur: ger ügei ḡadana umtaḡu bolba: uda bolod öćüken ger-tür-iyen oroḡulĵu nigen-e ideġelen yabuqui-dur yeke biĵiĵi toḡtaqu-yin ḡadana ireĵu üġülerün: ta büġede möngġüi-lüge nigen bolba: tan-aća bi yakin qaḡaćin bülüge: kemen yeke daḡubar qayilabai: ĵalayir qong tayiĵi qalq-a-yin eĵen boluḡsan-u yosun eyimü bülüge::

後半部分のみ英訳が Okada 1972, pp. 70-71. にある。

この、ダヤン・ハーンの末子ゲレセンジェがハルハに入婿となって「ジャライルの皇太子」と呼ばれるようになった様子は象徴的であるが、ダヤン・ハーンの他の息子たちの場合も多かれ少なかれ同様であった。つまり、ダヤン・ハーンのモンゴル再統一というのは、チンギス・ハーンの末裔であるダヤン・ハーンの諸子が、モンゴル系の各有力部族の入婿になり、長として担がれたことであったのである。

ゲレセンジェには、この二人の妃によって七人の息子があつた。彼はハルハの十三のオトク(otoγ)を七子に分封したので、これ以後彼等は七旗(或いは七オトク)ハルハと呼ばれるようになった。『アサラクチ』は前述部分に続いて次のように述べる。

ゲレセンジェ・ジャヤガトゥ・ジャライルン・ホン・タイジの十八、そしてハントハイ・タイフ(太后)の二十三の時に生まれたアシハイ・ダルハン・ホン・タイジは庚寅(1530)の年生まれ。ノヤンタイ・ハタン・バートルは辛卯(1531)の年生まれ。ノーノホ・ウイジェン・ノヤンは甲午(1534)の年生まれ。アミン・ドゥラール・ノヤンは丙申(1536)の年生まれ。ダライは庚子(1540)の年生まれ。デルデン・クンドゥレンは壬寅(1542)の年生まれ。同じその壬寅(1542)の年に小太后はアルタイ姫を生んだ。甲辰(1544)の年にサムを生んだ。乙巳(1545)の年にミンガルン姫を生んだ。丙午(1546)の年にトゥメンケン姫を生んだ。

アシハイにはウネゲト、ジャライルの二つ、ノヤンタイにはベスト、エルジゲン、ノーノホにはケレグト、ゴルロス、アミンにはホロゴ・クリエ、チョゴホル、ダライにはコケイト、ハタギン、デルデンにはタングト、サルタグル、サムには唯一つウリヤンハンを与えた。ゲレセンジェ・ジャライルン・ホン・タイジは三十六歳の時ケルレン河のボロングで亡くなった⁵⁸⁾。

ゲレセンジェの七子のうち六番目まではハントハイから生まれた息子たちであり、末子のサムのみがウリヤンハンのメンドウの娘が生んだ息子で、ウリヤンハンを相続した。ゲレセンジェの死後、確かに七人の息子がハルハを相続し、ハルハはこれに因んで七旗と呼ばれることになったが、第五子のダライには子供がなかった。後世の年代記はダライを除く六子の子孫を伝えるのみであるから、「七旗ハルハ」が実際に存在したのはほんの一時期であったに過ぎない。

先に述べた「ドルベン(四)・オイラット」も一例であるが、各種のモンゴル年代記はモンゴルの諸集団を呼ぶ時、ほとんど例外なく何らかの数字を冠する。それらは恐らく、最初は各々根拠があつたのであろうが、実情を反映していた時期は歴史の流れから見てほんの一瞬であつたと思うべきである。

外モンゴル一帯に住地を広げたハルハは、この後十七世紀末に清朝の支配下に入るまで七旗ハルハと呼ばれたが、「七旗」はハルハを意味する別称となり、実情を全く反映しな

58) Paringlai(ed.) 1960, pp. 72-73.

geresenje jayaxatu jalayir-un qong tayiji-yin arban naiman kiged qangtuqai tayiqu-yin qorin xurban-dur törögsen asiqai darqan qong tayiji čaxan bars-tai: noyan-tai qatan bařatur čaxayčın taulai-tai: noxonuqu üijeng noyan köke mori-tai: amin durařal noyan ulařay-beči-tei: darai čaxan quluřuna-tai: deldeng köndeleng qara bars-tai: mön tere qara bars jil-dür bařa tayiqu altai abai-yi töröbei: köke luu jil-dür samui töröbei: kökegčın mořai jil-dür mingřal-un abai-yi töröbei: ulařan morin jil-dür tümengken abai-yi töröbei: asiqai-du üneged jalayir qoyar: noyantai-du besüd eljigen: nořonuqu-du keregüd řorlos amin-du qorořo küriy-e čořoqor darai-du kökeyid qatagin: deldeng-dü tangřud sarta-řul: samu-du řařča uriyangqan-i ögbei: geresenje jalayir-un qong tayiji řučin řirřuřan nasun-dur-ıyan kerülen mören-ü borong-dur nög-čıbei::

かった。十七世紀のハルハが左右翼に分かれていたことについてはかつて論じたが、これはゲレセンジェの諸子分封に溯るのである。即ち長子アシハイ、次子ノヤンタイ、六子デルデン、末子サムの子孫はすべてハルハ右翼に属し、三子ノーノホ、四子アミンの子孫はハルハ左翼に属した⁵⁹⁾。

第二節 モンゴルのオイラット征伐

さて話を再びダヤン・ハーンとその六万戸に戻す。1524年のダヤン・ハーンの死後、帝位を継ぐべき長子のトロボラト (Törö bolad) はその前年に父に先立って死んでいたため、トロボラトの長子で二十一歳のボディ・アラク (Bodi alax) が即位するはずであった。しかし、ダヤン・ハーンの諸子の生存者中最年長 (四十一歳) で、しかも右翼三万戸を統率するジノンであったバルスポラトが帝位につき、サイン・アラク・ハーン (Sayin alax qaγan) と称した。ボディ・アラクは左翼勢力を糾合して叔父に迫って退位させ、帝位を奪いかえた。結局バルスポラトが譲歩したため左右両翼間の内戦には至らなかったが、右翼は1531年にバルスポラトが死ぬまでボディ・アラク・ハーンの支配下には入らなかった⁶⁰⁾。

年代は明らかではないが、恐らくダヤン・ハーンの死後、左翼万戸の一つであったウリヤンハンが反乱を起こした。最終的にこの反乱は鎮圧され、ウリヤンハン部族は解体されて、その民衆は他の各部族に分属させられた⁶¹⁾。そしてゲレセンジェに率いられるハルハ部が、ウリヤンハンに代って東部外モンゴルに進出したのである。当初ハルハ河一帯に遊牧していたハルハ部が、1548年ゲレセン

ジェが亡くなる時は、すでにケルレン河に至っていた。

1531年のバルスポラトの死後、第二代のジノン、グン・ビリク (Gün bilig) 以下のバルスポラトの諸子はボディ・アラク・ハーンの統制に服し、左右両翼間の平和はどうか保たれていた。しかしその間、右翼では1542年にグン・ビリクが死んでその長子ノヤンダラがジノンを継ぐと、これにかわって右翼の実質上の指導者になったのがグン・ビリクの次弟でトゥメト部長のアルタン (Altan) であった。アルタンは、1547年ボディ・アラク・ハーンが死ぬとその長子ダライスン (Darayisun) 以下を東方へ放逐した。ダライスンはチャハル部とアルジュボラトの裔である五旗ハルハを引き連れて移住し、大興安嶺の東斜面に定着したのである。

こうしてモンゴル高原の実権を正統のハーン家から奪ったアルタンは、これ以後三十五年にわたって絶大な勢力をふるった。1551年ダライスンと和睦したアルタンは、ダライスンのハーン即位を認める代償に、元代以来の名誉ある称号司徒を授けられ、ハーンと称することも許された。以後アルタンは、シト・ゲゲーン・ハーン (Situ gegen qaγan) として知られるようになった⁶²⁾。

明に対する侵攻の一方で、アルタン・ハーンはオイラットに対しても戦争をしかけた。これは新たなモンゴル=オイラット関係の始まりであった。オイラットのエセン・ハーンの死後一世紀の間、モンゴルとオイラットは目立った接触を持たなかった。オイラットは、ハンガイからアルタイ山を中心に、旧カラコルムも含めた外モンゴル西部に遊牧していたのである。

59) 宮脇 1979. 左の論文ではゲレセンジェの子孫の系譜を『王公表伝』に拠って作成したため、ゲレセンジェの七子の長幼順に『アサラクチ』との異同がある。『王公表伝』の伝えるところでは、子孫のなかったダライは六子で、デルデンが四子、アミンが五子ということである。本論ではすべて『アサラクチ』に拠る。

60) Okada 1972, p. 72. 岡田 1981, p. 202.

61) Nasunbaljur 1958, pp. 214-215. Haenisch 1955, 66-r. Okada 1972, p. 72.

62) Okada 1972, pp. 72-73. 岡田 1981, pp. 202-204.

さて、アルタン・ハーンのオイラット進軍について『蒙古源流』は次のように伝える。

アルタン・ハーンは四十七歳の壬子(1552)の年、四オイラットに出馬して、クンゲイ、ジャブハンの上に八千ホイトの長であるマニ・ミンガトを殺し、ジゲケン・アガという妻と、トホイ、ブケグデイの二子と、全部衆を降服させ、そのように羊を奪った四オイラットを支配下に入れた⁶³⁾。

クンゲイ (Künggei) ジャブハン (Jabqan) 両河は、ハンガイ山脈とアルタイ山脈の間にあって、キルギス・ノールに注いでいる。オイラットはこの敗北によってアルタイ山脈以東をモンゴルに明け渡したのであった。この戦闘から二年後の1554年、ハルハの始祖ゲレセンジェの孫にあたるアバダイ (Abadai) が生まれた時、その父であるゲレセンジェの第三子ノーノホのオトクはセレンゲ河にあったと『アサラクチ』は伝えているのである⁶⁴⁾。

オイラット討伐は引き続きモンゴル右翼の責務であった。1562, 1574年と、オールドスのフトクタイ・セチェン・ホンタイジ (Qutuγtai sečen qong tayiji) と、ブヤン・バートル・ホンタイジ (Buyan baγatur qong tayiji) がその任にあたり、四オイラットの各部を各所で破ったのであった。やはり『蒙古源流』によってその有様を見てみよう。

フトクタイ・セチェン・ホンタイジは庚子(1540)の年生まれ。二十三歳の壬戌(1562)の年に四オイラットに出馬して、イルティシュ河上にトルグートを襲ってハラ・ブーラを殺し、その籠^{かまど}に自分の黒い軍旗を突き立て、シルビスとトルグートの一部に掠奪

を行って凱旋した⁶⁵⁾。

そうこうするうち甲戌(1574)の年に、ブヤン・バートル・ホンタイジ兄弟たちが四オイラットに出馬して近づいて来ると聞いて、(フトクタイ・セチェン・ホンタイジは)バルス・コル上に輜重を留め、一緒に四オイラットに進軍して、バートル・ホンタイジがハルガイの南で、エセルベイ・キヤを長とする八千ホイト万戸を悉く降していた時、セチェン・ホンタイジはジャラン・ハンの北で、ハムス、ドリトク二人を長とするバートルを掠奪し、彼の息子オルジェイ・イルドゥチは三ヶ月経つまで追いかけて、食料がない時はボラ・トレゲという石を食べて過越し、トブハン・ハンの南にチョロースのパジラ・シゲジン⁶⁶⁾を長とするドルベト・オトクを掠奪して引返した。それからそれぞれ自分の帰る方向に同時に移動して戻って来る時、セチェン・ホンタイジはブルンギルの上から、ベゲイ・セチェン・ジャヤガチ、トゥベト・ハシハ・ジャヤガチの二人を始めとする使節を派遣して、「エセルベイ・キヤの眼はハゲタカの眼のようであった。常識的な行動をする人ではない。八千ホイト万戸の衆を分けて、その力を弱めよう」と言った。が、バートル・ホンタイジはその言葉に同意せず、そのサイトを外に坐らせている時、エセルベイ・キヤはセチェン・ホンタイジが彼を非常に可愛がっていたことから、鍋にある肉から勝手に馬の八つの高いあばら骨をその二人のサイトに与えた。そこで彼等を帰らせて、セチェン・バートル・ホンタイジは

63) Nasunbaljur 1958, pp. 227–228. Haenisch 1955, 70–r. 岡田 1968a, p. 9.

tendeče altan qaγan döčin doloγan nasun-dur-iyān sim quluγana jile: dörben oyirad-tur morilan: künggei jabqan degere: naiman mingγan qoyid-un noyan anu: mani mingγatu-yi alaju: jigekeñ aγ-a gergei-tei: toqoi: bükegüdei qoyar köbegüd-tei. ulus bügüde-yi inu oroγulju abuxad tere metü qonin abuγsan: dörben oyirad-i tuyil-dur-iyān oroγulun::

64) Paringlai (ed.) 1960, p. 77. この部分については後で述べる。

65) Nasunbaljur 1958, p. 229. Haenisch 1955, 70–v. 岡田 1968a, p. 9.

qutuγ-tai sečen qong tayiji: giñg quluγuna jiltei: qorin γurban-iyān sim noqai jile: dörben oyirad-tur morilan: erečiš mören degere: turγayud-tur dobtulju: qara buγura-yi alan: γolumta-dur anu: qara tuγ-iyān qadquγad: silbis turγayud qoyar-un jarim-i anu aγulan qariju baγubai::

エセルベイに非常に怒って、一頭の馬の全ての肉を、四つの高いあばら骨がついたまま踏みつけさせて、エセルベイ・キヤに「お前はこれを食べてしまえ。乳に指を突っ込むことは、牧群に捕馬竿を突っ込むことだとことわざに言うように、お前は私のなべに手を突っ込んで肉を取って、私の意向を人に与えた」と責めたてて、彼の指を挟みつけながら食べさせている時に、四オイラットは皆で話し合った。そこでエセルベイ・キヤは肉を食べ尽して出て行く時に、「馬の八つのあばら骨肉を私は食べなかった。我が父スタイ・ミンガトの八つのあばら骨肉を食う方がまだ」と言って地面を踏み鳴らして立ち去って、その夜に自分の軍を集めて進軍して来て、キルジャバク河上でパートル・ホントイジを殺して、エセルベイ・キヤは叛き去った⁶⁶⁾。

これら『蒙古源流』の叙述は、十六世紀のオイラットについて語る、ほとんど唯一の史料である。ここに登場するオイラット各部については次章で述べるが、ともかく、モンゴルはこの時、アルタイ山の奥深く攻め込み、

イルティシュ河上流からトゥワの地にまで至ってオイラット各部を掠奪したのであった。これら三度に亙るモンゴルのオイラット討伐は、すべてモンゴルの右翼、トゥメトとオールドスの手で行なわれたものであったが、これより後のオイラット征伐はゲレセンジェの裔である七旗ハルハの仕事となった。ハルハは最初、ダヤン・ハーンの左翼万户の一つであったが、後に五旗ハルハと七旗ハルハに分かれたことはすでに述べた。五旗ハルハは、左翼のチャハル部長ダライスンと、右翼のトゥメト部長アルタンとの争いの際、左翼のダライスンに率いられて大興安嶺の東へ移住した。七旗ハルハは恐らく右翼のアルタンに味方したのであろう。アルタン・ハーンのオイラット討伐の成功とともに七旗ハルハは外モンゴルに領地を広げ、オールドスの両タイジのオイラット討伐の後には、モンゴルを代表してオイラット討伐を一手に引き受けるようになったからである。

『アサラクチ・ネレト・テウケ』は次のように述べる。

ジャライルン・ホントイジの第三子ノーノ

66) Nasunbaljur 1958, pp. 234-236. Haenisch 1955, 72-r, v. 73-r. Okada 1972, pp. 74-75.

teyin atala ga noqai jile: buyan baɣatur qong tayiǰi aq-a degüü-ner-iyer: dörben oyirad-tur morilan ayisuqui sonosun: bars köl degere kötel-iyen talbiǰü: jergeber dörben oyirad-tur ayalaɣad: baɣatur qong tayiǰi qarɣai-yin ebüre: eselbei kiy-a terigülen: naiman mingɣan qoyid tümen-i büküli oroɣulun büküi-e: sečen qong tayiǰi: ǰalaman qan-u aru degere: qamsu düridkü qoyar terigülen baɣatud-i aɣulǰu: köbegün inu. ölǰei ildüci: ɣurban sara boltala kögen: künesün ügegüi-e: bora tülege kemekü čilaɣun iden yabuǰu: tubqan qan-i ebüre: čooroɣas-un baǰira sigeǰin terigülen: dörbed otoɣ-i aɣulǰu ireged: tendeče tus tustayɣan jergeber negüǰü qarın ireküi-e: sečen qong tayiǰi bulunggir degere-eče: begei sečen ǰayaɣaci: töbed qašq-a ǰayaɣaci qoyar terigülen elčis-i ilegen: eselbei kiy-a-gi-yin nidün inu qaǰir-un nidün metü bülüge: ǰüg-iyer yabuqu kümün busu bui: naiman mingɣan qoyid tümen ulus-i inu qubiyajü: küčün-i anu salɣay-a kemegsen-dür: baɣatur qong tayiǰi tere üge-yi ülü jöbsiyen: tere sayid-i ɣadana saɣulɣan büküi-e: eselbei kiy-a. sečen qong tayiǰi imai yeke-de qayiralam bülügei kemen: toɣoɣatu miqan-ača erkeleǰü: morin-u naiman öndör qabirɣ-a tere qoyar sayid-tur ögčüküi: tedüi teden-i qariɣululɣad: sečen baɣatur qong tayiǰi. eselbei kiy-a-dur yekede kilinglen: nigen morin-u büküli nari dörben öndör qabirɣ-a: dalangtai inu giškilegölün eselbei kiy-a-dur či egüni baradqun: sün-dür quruɣu: sürüg-tür uɣurɣ-a dürübe kemegsen metü: či minu toɣan-dur ɣar dürüǰü miq-a abun: minu ǰoriɣ-i kümün-e ögbei: kemen dongɣodču: quruɣud-i anu qabčın aǰu idegölün büküi-e: dörben oyirad qotalaɣar-a kemeldüǰüküi: tedüi eselbei kiy-a miqan-i baraǰu orkiɣad: ɣarču odqui-dur-iyen: morin-u naiman qabirɣ-a ese idebei bi: ečige-yügen sutai mingɣatu-yin naiman qabirɣ-a idebesei kemen: ɣaǰar debesen oduɣad mön sönide čerig-iyen quriyan morilaǰu iren: kirǰabaɣ-un ɣool degere: baɣatur qong tayiǰi-yi qoroɣaɣad:: eselbei kiy-a urbaǰu odbai:

ホ・ウイジェン・ノヤンのオトクがセレンゲ河にある時に、甲寅（1554）の年にエチエンケン・ジョリクト・ハトンから一人の子供が月満ちて生まれれば、彼の人差指は血で黒く染まっていたのであった。名前をアバダイと名づけた。それから彼は十四歳から二十七歳に至るまで引き続き戦争に従事し、異族の敵を彼の力に入れ、すべての兄弟たちを自分と差をつけずに助けて、万人の頭であるトシェート・ハーンと称号を奉られて大いに有名になった⁶⁷⁾。

アバダイ (Abadai) の戦った「異族の敵」が四オイラットであったことは、他の史料から確認できる。かなり後世の作であるが、他の年代記には見られない独自の情報を含む『エルデニイン・エリケ』——1841（道光二十一年）年にハルハのトシェート・ハーン部で書かれた——は、次のように伝えている。

オイラットに対する古い仇を討つために、（アバダイは）ハルハの兵を率いて出馬して、コブコル・ケリエという地に至って戦う時に、オゲレット（=オイラット）軍は破られて、ある者は死霊となった。ある者は馬の足を抱いてかっこうのように鳴いた時に、アバダイ・ハーンは「昔の三十三人の

冠毛ある者、四十四人の尾羽ある者、六十一人の旗を持つ者の仇は今日取った」と仰せられて帰った。自分の息子シュブーダイを遣して、オイラットにハーンとして君臨させた⁶⁸⁾。

このコブコル・ケリエ (Köbkör keriy-e) の地でアバダイが破ったオイラット軍は、ホシュートのハーナイ・ノヨン・ホンゴル (Qanai noyon qongxor) が率いる軍であった。『シラ・トージ』追補には、「ハーナイはコブケル (Köbker) の戦いで、サイン・ハーン (Sayin qaγan) が殺した」とある⁶⁹⁾。サイン・ハーンとは『アサラクチ』の系譜にも登場するアバダイの称号であって、トシェート・ハーン号が使われるのは実はアバダイの孫ゴンボ (Gömbü) の時代になってからである。

また、『エルデニイン・エリケ』にあるアバダイの言葉「昔の三十三人の冠毛ある者 (örbölge), 四十四人の尾羽ある者 (otoγ-a), 六十一人の旗を持つ者 (kigiri-tü) の仇は今日取った」というのは、『蒙古源流』、『アルタン・トブチ』が伝える、オイラットのエセンによるモンゴルのアクバルジ・ジノン (Aγbarji jinong) 暗殺事件を指している⁷⁰⁾。

このアバダイ・サイン・ハーンこそ、トゥ

67) Paringlai(ed.) 1960, p. 77. 注64)で触れた箇所はこの部分である。

jalayir-un qong tayiji-yin xutaγar köbegün noγonu-qu üijeng noyan-u otoγ selengge mörön-e бүкүй-дүр: modun bars jil-dür ečegen joriγtu qatun-ača nigen keüken nirayilabasu qomoyoi quruγun anu qara čisutai törög-sen buyu: nerei abadai kemen nereyidbei: tendeče arban dörben nasun-ečegen qorin doloγan kür-tele ürgüljide dayisun-i üile üiledčü: qari dayisun-i öberün erke-dür-iyen oroγulju: qamuγ aq-a degüüs-iyen öber-eče ilγal ügei tedküjü: qamuγ eki tüsiyetü qaγan kemen čolo ergüdejü yekede aldarsibai::

68) Natcogdorji (red.) 1960, p. 88. Okada 1972, p. 75. に英訳がある。

oyirad-ača qaγučin ös-i nekekü-yin tula. qalq-a-yin čerig-i abču mordoxad. köbkör keriy-e kemekü xajar-a kürčü bayilduqui-dur ögeled čerig daruγdaju nigen kümün ongxo bolba. nigen kümün morin-u köl teberiγü kökögelegsен-dür abadai qan ber uridu-yin jučin xurban örbölge. döčün dörben otoγ-a. jiran nigen kigiri-tü ösiy-e ene edür-e abubai kemen ayiladču bučaba. öber-ün köbegün šubuxadai-yi ilegejü oyirad-tur qaγan saγulγaxad.

69) Шастина (ред.) 1957, p. 122.

70) Nasunbaljur 1958, pp. 182-183. Haenisch 1955, 57-r. 岡田 1966b, pp. 23-26.

エセン率いる四オイラットは計略を設けてモンゴルのアクバルジ・ジノンを酒宴に招き、家の内に大きな穴を掘って、ジノンを始め三十三人の冠毛ある者たち (örbelgeten), 四十四人の尾羽ある者たち (otoγatan), 六十一人の旗を持つ者たち (kegeriten) を捕えて、穴が一杯になる程殺したという。

メトのアルタン・ハーン以来のオイラット討伐の任を受け継ぎ、ハルハにおいて始めてハーンを称した人物であった。アバダイはまた、ハルハにチベット仏教をもたらした人としても知られている。やはり『アサラクチ』によると、アバダイの二十八歳の辛巳（1581）の年、トゥメトからやって来た商人たちの中に学者がおり、アルタン・ハーンの仏教帰依についてアバダイに語ったところ、アバダイに信仰の心が大いに生まれたという。彼は乙酉（1585）の年の夏シャンフト（Šangqu-tu）の北の古城に土台を築いて、いわゆるエルデニ・ジョー（Erdeni juu）を建立し、丙戌（1586）の年には第三代ダライラマ（Dalai blam-a）、ソナムギャツォに謁見した^{71）}。『蒙古源流』によると、ダライラマは1585年から1587年にかけて、オールドスからトゥメトに至る内モンゴルを巡錫していたことが知られる^{72）}。アバダイは恐らくトゥメトでダライラマに謁見したのであろう。ダライラマはこの時、アバダイを金剛手菩薩の化身（Vačirbani-yin qubilyan）とし、ノムン・イェケ・オチル・ハーン（Nomun yeke vačir qaγan）と称号を賜った^{73）}。これは、モンゴルの強力な指導者であったトゥメトのアルタン・ハーンが1582年に死んだ後のことである。モンゴルの有力な部族長はこれより後それぞれハーンを名乗って、各地に割拠するようになったのである。

さて、ハルハとオイラット関係について、『エルデニイン・エリケ』はこう続ける。
戊子（1588）の年、ダライラマ・ソナムギ

ャツォと、アバダイ・サイン・ハーンがお亡くなりになった。サイン・ハーンが亡くなられるや否や、オイラットたちはシュブーダイ・ハーンを捕えて弑めて叛いた^{74）}。

ところがこのシュブーダイは『シラ・トージ』によると癸酉（1573）の年生まれ、三人の妃から生まれた三子があった^{75）}。父アバダイの死んだ1588年当時僅か十六歳であるから、この年にオイラットに殺されたとする『エルデニイン・エリケ』の記述は信用することはできない。1970年にモンゴル人民共和国で発見されたいわゆる『白樺文書』中の法典類によっても、シュブーダイ・オルジェイト・ホンタイジ（Šubuyadai öljei-tü qong tayiji）がかなり後年まで生存したことが推定できる^{76）}。しかし、アバダイ・ハーンの死後、オイラット征伐の任は今度はハルハ右翼の手に移ったのであった。

パラスは次のように言う。

「十七世紀の初頭において、同盟せるオイラット諸族——それらの世襲的諸首長はすべて未だ年少で、モンゴル人は、常にそれらの上に、自己の以前の支配権を確保しようと努めていた——は、モンゴルのライフル・ハンとの数戦において幸運に恵まれず、遂にその支配権を承認し、多少ともそれに従属せざるを得なくなった。」^{77）}

先のアバダイ・ハーンはゲレセンジェの第三子ノーノホ・ウイジェン・ノヤン（Noγonuqu üijeng noyan）の長子で、彼の子孫がトシュート・ハーンを称してハルハ左翼を率い

71) Paringlai(ed.) 1960, pp. 77-78.

72) Haenisch 1955, 82-v, 83-r.

73) Paringlai (ed.) 1960, p. 78.

74) Natcogdorji (red.) 1960, p. 89.

šar-a quluγan-a jil dalai blam-a sodnamjamčo abadai sayin qan-nar taγalal bolbai. sayin qan taγalal bolumaγča. oyirad-nar šubuyadai qan-i bariju nögčilgeded urbajuqui.

75) Шастина (ред.) 1957, pp. 114, 119. 岡田 1968a, pp. 11-12.

76) 二木 1981, pp. 52-53. によると、シュブーダイは白樺法の三つの法典、すなわち III (1603年制定)、VIII (1614)、XVI (1608) の編纂者のリストの中に名を連ねているという。しかしこの III の番号が付けられた法典は、参加者の出生年から考えて1615年のものではないかと筆者は推定する。ともかく、シュブーダイの卒年について今は留保したい。

77) Pallas 1776, p. 36. 宮脇 1981, p. 53.

ることになった。ライフル・ハーン (Layiqur qayan) はゲレセンジェの長子アシハイ・ダルハン・ホンタイジ (Asiqai darqan qong tayiji) の孫で、彼の子孫が後にジャサクト・ハーンを称して、ハルハ右翼を率いたのである。

ライフル・ハーンは1606年、エメール (Emegel) 河口のシャラ・フルスン (Šara qulusun) で四オイラットと対陣して和を結んだという⁷⁸⁾。

ハルハのオイラット征伐は、この後ライフル・ハーンの従弟で、同じくアシハイの孫にあたるショロイ・ウバシ・ホンタイジ (Šoloi ubasi qong tayiji) が専らその任を負うことになった。彼こそ、十七世紀初めシベリアに進出した新興勢力ロシアに対してアルタン・ハーンを自称したその人であり、オイラットの著名な文学作品『ウバシ・ホンタイジ伝』の主人公となった人物であった。そしてこのショロイ・ウバシ・ホンタイジの孫で、第三代アルタン・ハーンを称したエリンチン・ロブサン・タイジが、第一章で述べた十七世紀のハルハ内乱の張本人であったのである。

第五章 ドルベン・オイラットの構造と牧地

四世紀に及ぶモンゴル=オイラット関係の最終段階であるハルハ右翼のアルタン・ハーンとオイラットとの関係に入る前に、トゥメトのアルタン・ハーン以来モンゴルが征伐を繰り返したオイラットはどのような構造であったのか考えてみたい。

第三章第一節で述べたように、オイラット史料によって解明し得る十六、七世紀のドルベン・オイラットの構成集団は、旧オイラット系のホイトとバートト、バルグト系のバルグとブリヤート、ナイマン系のドルベトとジュン・ガル、ケレイト系のトルグート、東

モンゴルの三衛系のホシュート、以上である。

第四章第二節で述べた『蒙古源流』中のオイラット軍の状況は、また十六世紀における有力集団とその牧地を知る好材料である。

「1552年、クンゲイ、ジャブハン両河上で、八千ホイトの長マニ・ミンガトは殺される。」

「1562年、イルティシュ河上で、トルグートのハラ・ブーラが殺される。」

「1574年、ハルガイ山南で、エセルベイ・キヤを長とする八千ホイト万戸が破られる。」

「同年、ジャラマン・ハン山北で、バートトが掠奪される。」

「同年、トブハン・ハン山南で、チョロースのバジラ・シゲジンを長とするドルベト・オトクが掠奪される。」

「1580年代末、コブコル・ケリエでホシュートのハーナイ・ノヨン・ホンゴルはアバダイに殺される。」

以上により、十六世紀のオイラットは諸集国の連合体で、各々の長が各集団を率い、ハーン存在は見られないと結論づけることができる。諸集団の中では八千ホイト万戸が有力で、カラコルムからアルタイ山中の好牧地に遊牧したが、モンゴルに掠奪され、追われたのである。その他トルグートはイルティシュにおり、チョロースのドルベト・オトクは遙か北方のトゥワの地にあった⁷⁹⁾。

ホイトのエセルベイ・キヤは、『蒙古源流』所伝でもわかるように勇猛を以って知られた人物で、オイラット年代記やパラスにも英雄として登場する。ところが二度に亙るモンゴルの攻撃でホイト部は弱体化したのであろう。次にジャブハン河の南の交通の要衝コブコル・ケリエでハルハ軍と戦ったのはホシュートであった。この時ホシュートの長ハーナイ・ノヨン・ホンゴルは殺されたが、五虎と呼ばれた彼の息子たちが後に四オイラット全体に影響を及ぼす有力者に育ったのである。

78) これは『ウバシ・ホンタイジ伝』と、オイラットのグシ・ハーンについて記されたチベット史料を照合して導き出された結論である。岡田 1968a, pp. 3, 12. 山口 1963, p. 748.

79) 『蒙古源流』所伝の戦場については、岡田 1968a, pp. 9-11. 和田 1959, pp. 788-789. 参照。

さて、十七世紀に入るとロシアのシベリア進出が盛んになり、彼等はオイラットと接触して数多くの記録を残した。特にオイラットに再三派遣された使節団の記録は非常に貴重な史料であり、今日それらは古文書資料集として刊行されていて容易に利用し得る⁸⁰⁾。これによると、1616年当時、全カルマックの筆頭のタイシャは、ドルベトのダライ・タイシ (Dalai tayiši) であった⁸¹⁾。そして、彼の側近の顧問として、チョークルとウルリュクがいたと、この時のロシア使節トミロ・ペトロフは述べている⁸²⁾。

ここに登場するウルリュクは、後にヴォルガ河畔に移住したトルグートのホー・オルロク (Xō örölöq) に間違いない。もう一人のチョークルは、この後ロシア史料に何度も登場し、有力な王侯として知られるが、これまで全く比定できなかったのであった。が、このチョークルは実はホシュート部の王公であったことが明らかである。

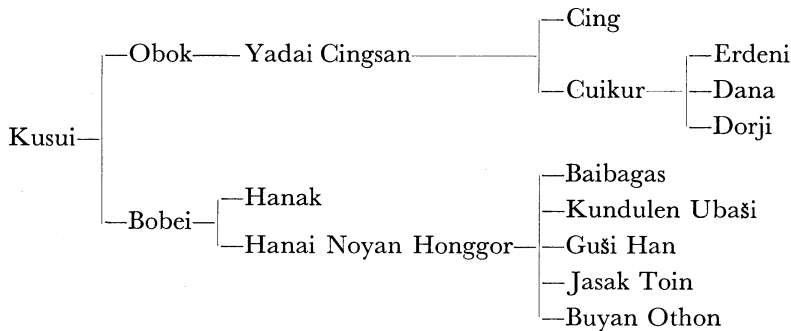
ホシュートの王公の系譜は様々な史料に伝えられているが、ここではまず、最も整理さ

れた『西城同文志』によって図表化してみよう⁸³⁾。

ホシュートが東モンゴル系であり、その首領の家系がチングス・ハーンの子弟ジョチ・ハサルから出ることについては第三章第一節ですでに述べた。これは勿論疑わしいのであるが、ともかく、エムチ・ガワンシャラブの『四オイラット史』によるとハプト・ハサルから数えて十四代目のクセイ (Kūsei) に、ウバク丞相 (Ubaq čingsen), ボコイ・ミルザ (Bököi mirža) の二子があった。これは下記の系譜と一致する。ガワンシャラブはさらに続けて言う。ウバク丞相の子はヤダイ丞相 (Yadai čingsen), その子はウール・ウージャン・シュクル (Uur uužang šükür), その子はエルデニ (Erdeni)⁸⁴⁾。

さて、モンゴルの年代記『シラ・トージ』は次のように伝える。

オール・ウイジェンの父はヤダイ、母はアハイハン・ハトンで、ヤダイの死後、ハーナイから生まれたバイバガスと二人であって、オジエト氏である⁸⁵⁾。



80) МИРМО 1959.

81) この1616年の全カルマックの筆頭のタイシャ、ボガティリ・タライ・タイシャが、パラスや若松の言うような「ジュン・ガルのバートル・ホンタイジ」ではないことについては、かつて論じた。宮脇 1981, pp. 52-54. 参照。

82) МИРМО 1959, док. No. 18 л. 74. 屋敷 1981, p. 3.

83) 『欽定西城同文志』研究篇 1964, Table III.

84) Rincen (red.) 1967, p. 76.

85) Шастина (ред.) 1957, p. 122.

ахур үйјeng-үн есіге ину yadai: eke ину аqayıqan qatun. yadai-yi үкүgsen-ү qoyına: qanai-ača törögsen bayıbağas qoyayula bui: öjıyed omoğ-tai:

再びガワンシャラブによると、ボゴイ・ミルザの子がノヨン・ホンゴル (Noyon xongγor), これにアハイ・ハトン (Axai xatun) から五虎と呼ばれる五子, アルブト・アガ (Albutu aγa) から二子があった。

以上を整理すると、ヤダイ・チンサンと、コブコル・ケリエの戦いでハルハのアバダイに殺されたハーナイ・ノヨン・ホンゴルとは従兄弟である。ヤダイ・チンサンの子シュクル (Šükür) 或いはチューケル (Čöüker) と、バイバガス (Bayibaγas, Boyiboγos) を始めとするハーナイの五子とは、父系では再従兄弟であり、しかも同母異父兄弟であったことがわかる。

ホシュートのチョークルは、ドルベトのダライ・タイシの側近となり、自分の娘をトルゲートのホー・オルロクの子シュクル・ダイチン (Šükür dayičing) に娶せ⁸⁶⁾、ホシュートの有力な長として勢力を振っていた。一方、五虎の長兄バイバガスもまた、ホシュートの有力な長であったことは疑いない。オイラット史料は全て一致して、オイラットの支配層がチベット仏教に帰依した時の四オイラットの指導者はバイバガスであったと述べているのである。

ホシュートのゴロゲチン (Görögečin)・オトク出身のザヤ・パンディタが、1616年僧に

なるくだりを三種の史料から見ると、ガワンシャラブは「四オイラットのたづな(指導者)、バイバガス」⁸⁷⁾ と言い、バートル・ウバシ・トゥメンは「独立する四オイラットをことごとく治めていたハーンはバイバガスであった」⁸⁸⁾ と言い、その本人、ザヤ・パンディタの伝記ではこう言う。

チェチェン・ハーンの父ノヤン・バイバガス・バートルを始めとし、四オイラットのノヤンたち皆が一人ずつの自分の息子を新発意(バンディ)にしようと約束し合った時に、他のノヤンたちは皆自分の息子一人ずつをバンディにした。バイバガス・バートル・ノヤンは、私の子孫のためにバンディになれと言った時、十七歳の時に(バイバガスの代わりにパンディタが)マンジュシリ・フトクトからバンディになったのであった⁸⁹⁾。

この三種のオイラット史料のうちでは『ザヤ・パンディタ伝』が最も古く記された同時代史料である。ホシュートのバイバガスは有力な指導者であったが、「バイバガス・バートル・ノヤン」であって、ハーンを称したわけではなかったと筆者は考える⁹⁰⁾。

元来四オイラットは連合体であった。対外戦争や会盟など、統率者を必要とする時には、自分たちの間で、その時年長で経験に富み勇

86) МИРМО 1959, док. No. 72. 宮脇 1981, p. 49.

87) Rincen (red.) 1967, p. 81. 宮脇 1981, p. 51.

88) Позднеев (ред.) 1915, p. 32. 宮脇 1981, p. 51.

89) Ratnabhadra 1959, p. 4.

čečen qan-u ečiγe noyan baγbaγas baγatur terigülen: dörben oyirad-un noyad büγüdeger: niγiged köbegün-iyen bandi bolγay-a kemeγü ama abulčayγsan-du: busu noyad čöm niγiged köbegüd-iyen bandi bolγabai: bayibaγas baγatur noyan: minu ür-e-yin tölöge-dür bandi bol kemeγsen-dü: arban doloγan-duriyan: mangjuširi qutuγtu-ača bandi boluγsan aγiγu::

90) 屋敷 1981, pp. 3-4 には、1610年代にジュン・ガルのバートル・タイジが独立していた例として、以下の二例が挙げられている。出典はいずれも МИРМО 1959. である。

「1617年11月、バートルとダライの二人がトボリスクへ使者を派遣した。」(док. No. 25.)

「サウエリエフは1617年7月から9月にかけてバートルの本營に滞在したが、その時すでにバートルは妻帯しており、彼には子供二人がいた。また彼の傍には二人のラマ僧がいた。」(док. No. 26. лл. 13-14.)

この二例のバートルが、ホシュートのバイバガス・バートルであることはすでに明白である。バイバガスは1616年仏教に帰依したのであるから、二人のラマ僧が傍にいたことも頷けるし、彼には少なくとも二人の息子、オチルト(のちチェチェン・ハーン)とアブライがいた。

敢な、そしてもちろん出身の良い者を首長に選んだのであった。十六世紀から十七世紀初めにかけて、四オイラット各部に有力な長が存在したことが伝えられるが、固定した権力構造を持つ遊牧帝国を想像することは誤りである。

さて十七世紀初めからモンゴルのオイラット征伐の任を一手に引き受けていたハルハ右翼のアルタン・ハーン、ウバシ・ホントイジに対して、オイラットはついに反抗し、戦争をしかけたのであった。ロシア古文書史料によると、1620年ジューン・ガルのハラフラと、トルグートのメルゲン・テメネがアルタン・ハーンの本営を攻め、多くの捕虜を奪った。アルタン・ハーンはこれを取押えるために多くの兵を差向け、ハラフラの民を皆殺しにした。その結果、アルタン・ハーンと四オイラット全てが戦闘状態になったのである⁹¹⁾。

このハルハとオイラットとの戦争を題材にした文学作品が、ここですでに何度も取り上げた『ウバシ・ホントイジ伝』である。これは後世の作品であり、また物語性に富んでいるため、伝えるべき事は必ずしも史実とは言い難いが、オイラット人がモンゴルについて書いた唯一の史料であり、彼等のこの戦争に対する評価が現われている点でも貴重な史料である。以下で、この『ウバシ・ホントイジ伝』の伝える四オイラット連合軍の編成の様と戦闘前夜の士気を詠んだ箇所を、少しく紙数を割いて引用する。

モンゴルのウバシ・ホントイジと、ウリヤンハイ (Uriyangqai) のサイン・マジク (Sayin majix) の二人は、ハンガイから四オイラットの征伐に八万の兵を率いて進軍し、二百の哨兵を四オイラットの牧地の方角に派遣した。哨兵はイルティシュ河のマニ渡口を渡り、エメール河のシャラ・フルスンを捜索し、バジ、ギンジリの河原で「バイバガス・ハーンの部民」と称する七歳の男の児を捕えた。そして、モンゴル軍の陣営に連れて来ら

れたこの男の児の口からオイラット軍の情況が語られるのである。

男の児は知らせる。
 オイラットのこちらの端に、
 全く銀の兜を被った、
 突起のついた紅い甲を着た、
 絹の美しい綿入れを着た、
 豹花馬に乗った、
 マンガットの息子サイン・セルデンキは、
 二千の自分の若党を従えて、
 二千の自分の槍を突き立てて、
 二千の自分の馬を繋いで、
 走り過ぎる獣はどこにいる、
 戦い合う敵はどこにいると、
 自分の歯をきしり、
 自分の唾を呑みこんで坐る。
 殿様方、それについて汝の意はいかがであるか。
 よろしい、汝のそれは構わない。その向うに誰がいるのか語れと言った。
 イルティシュ河の源に下営して、
 イルジン、ハルジン二つの自分の牧地を集めて、
 黒い弓の白い弓面のように、
 すべてから目立って、
 ホイトのエセルベイン・サイン・キヤは、
 四千の自分の若党を従えて、
 四千の自分の槍を突き立てて、
 四千の自分の馬を繋いでいる。
 死に合う敵はいるか、
 頼る若党はいるかと、
 自分の歯をきしり、
 自分の唾を呑みこんで坐る。
 殿様方、それについて汝の意はいかがであるかと言った。
 よろしい、汝のそれは構わない。その向うに誰がいるのか語れと言った。
 多くの羊の群れを襲撃した、
 尾のない青い狼の形のある、
 食べ残しの物を食べたことのない、

91) 詳細は宮脇 1981, pp. 44-46 参照。

飢えた鷲の眼のある、
 ジューン・ガルのホトゴイト・ハラ・フラ
 は、
 六千人とともに、その形でいる。
 殿様方、それについて汝の意はいかがであるか。
 よろしい、汝のそれは構わない。その向うに誰がいるのか語れと言った。
 ナリン河の源に、
 細い薄栗毛の馬に乗った、
 八千の兵を率いる、
 ウルト河の河股に、
 オイラットのサイン・テメネ・バートルはその形でいる。
 殿様方、それについて汝の意はいかがであるかと言った。
 よろしい。汝のそれは構わない。その向うに誰がいるのか語れと言った。
 自分が殺したり奪ったりするのが好きな、
 十虎の声を持つ、

恐ろしい五虎の長兄、
 ホシュートのバイバガス・ハーンは、
 一万六千の自分の若党を従えて、
 十五面の格子壁からなる、
 模様のある真白な自分の帳幕で、
 四オイラットの政、教二つを語って、
 四方に我と並び合う一人の名高い男もいないのであるぞと言って、
 自分の口を張り開いて、
 自分の掌をひろげて待ちかまえているという話だ⁹²⁾。

ここに登場するサイン・セルデンキ (Sayin serdengki) は、ドルベトのダライ・タイシの兄弟マンガット (Mangγad) の息子である。次のエセルベイン・サイン・キヤ (Eselbeyin sayin kiya) は、『蒙古源流』の伝える英雄エセルベイ・キヤの息子である。ジューン・ガルのハラ・フラ (Qara qula) は、ドルベトと同じジョロースで、エセン・ハーンの後裔である。ジューン・ガルはこの時歴史舞

92) 『ウバシ・ホンタイジ伝』は、岡田 1968a, pp. 1-6 にはほぼ全訳されているが、この部分に限って要約されているので、ここに改めて訳出した。

Damdinsürüng (red.) 1959, p. 186.

köbögün medegülün-e. oyirad-un naγadu jaq-a-du tuji mönggün duγulγatai. toboruγu-tu ulayan quyaγ-tai. torγan sayiqan olba-tai. tolbotai čoqor moritai. mangγad-un köbögün sayin serdengki. qoyar mingγan jalayū-ban daγaγulju. qoyar mingγan jida-ban qadquju. qoyar mingγan mori-ban soyiγu. daγariqu görögesü qamiγ-a bayin-a. dayilalduqu dayisun qamiγ-a bayin-a geγü. sidü-ben qabirču silüsü-ben jalgiγu saγun-a: noyad tegün-dü dur-a činu yamar bayin-a:

isala tere činu γaiγui: tegün-ü čaγan-a ken bayidaγ bui: kele gebe: erčis γool-un ekin-dü baγuγad. irjün qarjün qoyar nutuγ-iyan čuγlaγulju. qara erdegči-yin čaγan elige metü. qamuγ-ača ilereγü. qoyid iselbeyin sayin kiy-a. dörben mingγan jalayū-ban daγaγulju. dörben mingγan jida-ban qadquju. dörben mingγan mori-ban soyiγu bayin-a: üküldekü dayisun biliü. nökečekü jalayū biliü geγü. sidü-ben qabirču. silüsü-ben jalgiγu saγun-a: noyad tegün-dü dur-a činu yambar bayin-a gebe:

isala tere činu γai ügei: tegün-ü čaγan-a ken bayidaγ bui: kele gebe: olan sürüg qonin-du dobtuluγsan. oγotor köke činu-a-yin kebtei. önjün yaγun-a idege ügei. ölöng bürgüd-ün nidütei. jögün γar qotoγoyid-un qara qula. jirγuγan mingγan kümün-tei. tere keb-iyer bayidaγ: noyad tegün-dü dur-a činu yambar bayin-a:

isala tere činu γai ügei: tegün-eče čaγan-a ken bayidaγ bui: kele gebe: narin γool-un ekin-dü. nariqan šarγ-a moritai. naiman mingγan čerig-tei. urtu γool-un belčir-tü oyirad-un sayin temen-e baγatur tere keb-iyer bayidaγ: noyad tegün-dü dur-a činu yambar bui gebe:

isala tere činu γai ügei: tegün-ü čaγan-a ken bayidaγ bui: kele gebe: alaqu bulaqu-daγan duratai. arban bars-un daγutai. ayiqubtur tabun bars-un aq-a. qošud bayibaγas qan. tüme jirγuγan mingγan jalayū-ban daγaγulju. arban tabun termetei. alaγ bayibang ordon-daγan. dörben oyirad-un törö šajin qoyar-i küüneγü. dörben jüg-tü nada-tai adaličaqu nigen čimege kümün ügei bui j-a geγü. ama-ban angγaiγu. alaγ-a-ban sarbayiγu saγun-a gedeg:

台上に登場し、ハラ・フラの子バートル・ホンタイジ (Baɣatur qong tayiji) の時代に勢力を伸ばして、その子センゲ (Sengge) とガルダン (Galdan) の時代に四オイラットで最も有力な集団に成長したのである。次のサイン・テムネ・バートル (Sayin temene baɣatur) はトルグートのテネス・メルゲン・テムネで、ホー・オルロクの再従弟にあたる⁹³⁾。そしてホシュートのバイバガスが四オイラット連合軍を率いたのであった。

ロシア史料によると、この時の四オイラット連合軍には、ドルベトのダライ・タイシ、ホシュートのチョークル、トルグートのホー・オルロクも加わっていた⁹⁴⁾。両者を照合して考えると、ドルベトから叔父のダライ・タイシと甥のサイン・セルデンキの二人、トルグートからは再従兄弟にあたるホー・オルロクとメルゲン・テムネの二人、ホシュートからもやはり再従兄弟で同母異父兄弟のバイバガスとチョークルの二人が各集団の長として参加していたことがわかるのである。

このモンゴルとオイラット間の戦いは四オイラット軍の勝利に終り、ウバシ・ホンタイジはドルベトのサイン・セルデンキの槍で突き殺された。モンゴルを破り、異族への貢納義務から解放されたオイラットは、しかし間もなく遺産争いを発端に各部が分裂してしま

ったのである。ロシア古文書は、この発端となった事件を次のように伝える。

「チョクルとバイバギシュ両タイシャの兄弟チン・タイシャが死んだ。チョクル・タイシャはかれの家畜と部民を自分のものにして、兄弟のバイバギシュの自由にさせなかった。そこでバイバギシュはやって来て、力づくでチン・タイシャの部民と家畜を奪った。そのためにチョクル・タイシャとバイバギシュの間に不和が生じた。そして戦いになるらしい。そこでタライ・タイシャはこれを聞いて、二人のもとへ和解させに赴いた。一千人を率いて行った。……タライ・タイシャはチョクル・タイシャのもとへ来て、かれらの兄弟チン・タイシャの家畜を等分し、五百人をバイバギシュ・タイシャに、チョクル・タイシャに五百人を渡すつもりだった。そこでバイバギシュはチョクルに五百人を渡そうとした。ところがチョクルは一千人全部を得ようとして、カルマックのタイシャら、メルゲン・テムニ、クヤン、タブイタイと集まって、バイバギシュを攻めに行った。かれらの兵力は三万だった。タライ・タイシャはチョクルに加わらず去って、夜、秘かにバイバギシュ・タイシャに、チョクル・タイシャが大挙して汝を攻めに行こうとしているという情報を与えた。だがチョクル・タイシャは塩湖の近くバイバギ

93) 四オイラットの各集団の首領の系譜を以下に図表化しておく。

チョロース部、ドルベト

Ongyoi? —Mangɣad—Sayin Serdengki
—Dalai tayiši

チョロース部、ジューン・ガル

Ongyočo—Bulin tayiši—Xara xula—Batur xontayiši—Sengge
—(Cukur)—Bošoqtu xān (Galdan)

(ガワンジャラブ『四オイラット史』)

ホイト部

Vaciрай mingɣ-a-tu—Sutai mingɣ-a-tu—Eselbei kiy-a—Nom dalai (Sayin kiy-a)

(『ジャラグスン・フリム』, バートル・ウバシ・トゥメン『四オイラット史』)

トルグート部

Mengge—Boyıɣo örölöq—Žulžaɣa örölöq—Xō örölöq—Šükür dayičing
—Ongxon čabčāči—Eženē tayiši—Tenes mergen temene

(ガワンジャラブ『四オイラット史』)

94) МИРМО 1959, док. No. 55, 56, 63, 64. 宮脇 1981, pp. 44-46.

シュ・タイシャの所へやって来て、多くの民を殺し、家畜を奪い、残った者は自分の手中に収めた。そのためにバイバギシュの民は少なくなつて、皆避難していた。カラクラ・タイシャは、バイバギシュがチョクルに包囲されていると聞いて、チョクルに対するバイバギシュの援助に向つた。かれの兵力は一万だった。そこでチョクルは掠奪しつつ去つた。』⁹⁵⁾

前出の『西域同文志』の系譜を思い起こしていただきたい。ホシュートのチュイクル即ちチョクルには、父を同じくする兄弟チン即ちチン・タイシャがあった。その兄弟の遺産を、同母異父兄弟でしかないバイバガスと等分することは、チュイクルにとってさぞ不満であったことであろう。チュイクルが遺産を独占しようとしたのも尤もなことである。しかし、このホシュート内部の相続争いは、四オイラット全てを巻き込む内乱になつたのである⁹⁶⁾。

チョークルはかつてトルグートのホー・オルロクとともにドルベトのダライ・タイシの側近の顧問であったが、今やオルロクもダライ・タイシも彼を殺そうとした。チョークルの女婿であるオルロクの子ダイチンは、殺されるのを恐れて、チョークルのもとから父のもとへと全ての民を率いて逃げた⁹⁷⁾。

どの戦いにおいてか明らかではないが、バイバガスは戦死し、その兄弟のチョークルが代わつてタイシャになつたとロシア史料は伝えている⁹⁸⁾。チョークルはトルグートのメル

ゲン・テメネとともに遊牧していた。

ところが、ドルベトのダライ・タイシとその姻戚で殺されたバイバガスの弟グシ、同じくバイバガスの次弟クンデレン・ウバシはイシム河からトボル河まで逃げていたチョークルを追い続け、終に1630年、ヤイク (=ウラル) 河に至つてチョークルの部民を殺害したという⁹⁹⁾。

この頃トルグートのホー・オルロクは部民を引き連れてウラル河をさらに越えてヴォルガ河にまで移動してしまつた。ヴォルガ・カルムックと呼ばれるようになるこの集団の中には、ホシュートやジューン・ガルの一部も含まれていた¹⁰⁰⁾。

ハルハのウバシ・ホンタイジとの戦争からこのオイラット自身の内乱にかけての間に、四オイラットの内部構造は大きく変化してしまつた。1640年のモンゴル・オイラット法典第三条には「丁巳(1617)の年からのち戊辰(1628)の年まで、バルグ、バートト、ホイト人でモンゴルにいるのはモンゴルのものとした。オイラットにいるのはオイラットのものとした。彼等以外の生存者は、すべて遅滞なく相互に引き取ることになつた」とある¹⁰¹⁾。この間に、バルグ、バートト、ホイトはもはや独立の集団としては存在できず、解体してしまつていたのである。

この後1634-35年には、ドルベトのダライ・タイシ、ジューン・ガルのバートル・ホンタイジ、ホシュートのグシ・ハーン及びその兄

95) МИРМО 1959, док. No. 70. 宮脇 1981, p. 48.

96) 『ジュンガル汗国史』を著したソ連の研究者ズラートキン、若松寛、その他多くの研究者が、このチョークルをジューン・ガルのハラフラの息子でバートル・ホンタイジの末弟のチュクルと考えたため、この時代の四オイラット史が矛盾ばかり多く解明されないままであったのである。つい先頃の中国の研究(馬 1980.)や、屋敷 1981. も、ズラートキンの説に影響されている。筆者はかつてこれについて論じたが、(宮脇 1981.)ここではチョークルの出自を明らかにし得たことで、事件を一層明快に解釈できた。

97) МИРМО 1959, док. No. 72. 宮脇 1981, p. 49.

98) МИРМО 1959, док. No. 77. 宮脇 1981, p. 49.

99) МИРМО 1959, док. No. 77. 屋敷 1981, p. 12.

100) Howorth 1876, l. p. 580. 二つの『四オイラット史』はこのヴォルガ・カルムックで書かれたものであるが、バートル・ウバシ・トゥメンはホシュートの人である。

101) 田山 1967, pp. 124-125. 岡田 1968a, p. 12.

のクンデレン・ウバシがカザーフに遠征したことが知られる¹⁰²⁾。1636年にはホシュートのグシ・ハーンがジューン・ガルのバートル・ホнтаイジとともにトルグートの一部をも率いて青海遠征を行なった¹⁰³⁾。これ以後四オイラットの覇権争いは、ホシュート部とジューン・ガル部のみで行われることになり、かつて他部に有力な首長がいたことは、忘れ去られてしまったのであった。

四オイラット連合体の首長たちの勢力交代劇について確実なことはわからない。しかし、ガワンシャラブはこう伝える。

オイラットで、恩のある人の恩を返さなかったことを書く。三族ガルガスのチューケルを殺そうとした時に、カーが奪い去った。カーを害する時に、チューケルが参加した。四オイラットのノヤンたちに、自分の牧地を失ったことの害を書き留める。エセルベイン・カーは力によって自分の牧地を失った。ドルベトのダライ・タイシは自分の妻に支配させたまま失った。ある人は自分の子供のマンジュを殺したことによって失ったという。ある人は病気で失った(という)。チューケルは、人の部衆を多く掠奪して、自分の息子のエルデニが傲慢になって、子供を敵が害する時に、異なる世代の多くのノヤンたちが妨げて滅びたという¹⁰⁴⁾。

かつて四オイラットを率いる有力な首長であったホイトのエセルベイン・カー、ドルベトのダライ・タイシ、そしてホシュートのヤダイ丞相の息子チューケルはこのようにして歴史舞台から去った。そして新たにホシュートの故パイバガスの弟グシ・ハーン、ジューン・ガルのハラ・フラの息子バートル・ホнтаイジが優れた指導者として登場したが、四オイラットはあくまでも連合体であった。各集団の有力な長たちは、しばしば同族間で争い、却って姻戚関係にある他集団の長と結びついた。ホシュートのチューケルとパイバガスの遺産争いはすでに見た通りである。その後もジューン・ガルのバートル・ホнтаイジの息子たち、センゲとその兄弟たちの間の相続争い、ホシュートのパイバガスの息子たちオチルトとアブライの争いなど、オイラットの内乱はすべて兄弟間の遺産争いに端を発している。それぞれを、姻戚関係にある他集団の長が支援して争ったのである¹⁰⁵⁾。

最後に、四オイラットの所属集団は、決して各集団ごとに定まった牧地や境界線を持っていた訳ではないことを明言しておかねばならない。異なる集団の長たちが一緒に遊牧していた例については、ロシア古文書史料に散見される。十六世紀後半から十七世紀にかけて、四オイラット諸集団がアルタイ山中から

102) МИРМО 1959, док. No. 123. 宮脇 1981, p. 56.

103) 山口 1963, p. 750. 宮脇 1981, p. 55. 青海に遠征したホシュート、ジューン・ガル、トルグート部の各首長の系譜については、佐藤 1973. を参照。

104) Rincen (red.) 1967, pp. 84-85.

oyirodту ачитай күмүни ачийини есе җарҗақсаыини бичимүи:: җурбан еңиге җалғас чөүкери алан gekүдү: кә aldoulзи абуқсан: кәги xoröxu-du: чөүкер orolчақсан:
dörbön oyirodiyин noyodoudtu nutuҗән алдақсани gemi бичин үйiledүмүи:: eselbeyin кә erkär nutuҗән алдaba:: dörböd dalai tayiši аҗадән езуүлүсәр алдaba: җарим күмүн көбөүген манзougи алақсар алдaba gedeq:: җарим күмүн чилегәр алдaba: чөүкер күмүни ulus oло xарҗад көбөүни erдени omqotoi болөд көбөүгийини dayин xoröxu-du:: биши үйeyин олон noyodoudни xаршад ebdebe gedeq::

なお、三族ガルガス(җурбан еңиге җалғас)は、ホシュートの首領の姓である。同じガワンシャラブのホシュートの系譜を述べた部分には、ハプト・ハサルから数えて十代目の Tögüdei çingsen に続いて、「三族ガルガース(җурбан еңиге җалғас)はそれから成った」と記されている。(岡田 1974, p. 29) また、Howorth 1876, p. 499 にも、「ホシュートはガルガス(Galgas)という名の王家が治めていた」と記されている。

105) 宮脇 1981, pp. 58-59. 参照。

イルティシュ河、イシム河、トボル河からウラル河に至るまで、時と場合に応じて移動していたことについては、すでに触れた。これは主としてモンゴルという外部勢力に圧迫されたためであるが、十七世紀中葉、モンゴルからの圧迫が消滅した後も、彼等が家畜を連れて長距離を楽に移動したことは『ザヤ・パンディタ伝』の記述からも明らかである。四オイラットの牧地の変遷については、稿を改めて詳しく述べるつもりであるが、ここでは、その牧地も、所属集団も、有力な首長もすべて時代に応じて変化したことを結論としたい。

第六章 結論——ハルハ右翼とオイラット

第二章からここに至るまで、十三世紀初めからのモンゴル=オイラット関係を展開してきたが、本論もようやく結末に近づいた。ここでもう一度、本論を書く動機となった十七世紀のハルハ史における疑問点を挙げてみよう。

1662年、第三代アルタン・ハーンを称したエリンチン・ロブサン・タイジが、同じハルハ右翼の宗主ジャサクト・ハーンを私憾によって襲殺した。ハルハ左翼のトシェート・ハーン等がエリンチンを撃つたため、彼はオイラットに逃れた。これに端を発してハルハは左右翼に分裂して争い、ハルハ右翼のジャサクト・ハーン家と姻戚関係にあったオイラットのジューン・ガル部のガルダンが1688年ハルハに侵入して、ハルハは清朝に帰属することになったのであった。

疑問の第一はハルハ部の中になぜハーンが二人以上存在したのかということ、第二は第三代アルタン・ハーン・エリンチンがなぜ宗主のジャサクト・ハーンを殺したのかということ、第三はハルハ右翼とオイラットとの関係、以上である。

ここで簡単に十三世紀からのモンゴル=オイラット関係を振り返ってみると、本来のオ

イラットの住地は今のトゥワにあり、彼等はチンギス・ハーンに征服された部族であって、最初から狭義のモンゴルではなかった。このオイラット族に加えて、アルタイ山中を本拠地としたナイマン、ハンガイ山からケンテイ山に遊牧したケレイト、その北のバイカル湖から西方のバルグト族は、フビライの建てた中国王朝元の支配下には入らず、元朝崩壊後、元の遺臣の狭義のモンゴルと対立して、異族(qari)、ドルベン・オイラットとなったのであった。

第三章第二節で、ダヤン・ハーンの六万戸の一つ、オルドス万戸はチンギス・ハーンの四大オルドの後身であると述べた。ラティモアの報告によると、祀られているのはチンギス・ハーン自身とボルテ・フジン、そして左手のハトン即ちフラン・ハトンだけであったという。

チンギス・ハーンの大オルドはユルクンの旧営でケルレン河のコーデエ・アラル (Ködege aral) にあった。第二オルドはチンギス・ハーンのキャン氏族の本土でケンテイ山中のサアリ・ケエル (Saxari keger) にあった。第三オルドはケレイトのオン・ハーンの旧営でトール河のハラ・トン (Qara tun) にあり、第四オルドはナイマンのタヤン・ハーンの旧営でハンガイ山中にあった。大オルドはフングラトのボルテ・フジン、第二オルドはメルキトのフラン、第三オルドはタタルのイエスイ、第四オルドはイエスイの妹イエスケンが主宰の皇后であった¹⁰⁶⁾。モンゴルのオルドス万戸が第一、第二オルドの後身でしかないとするなら、第三、第四オルドを手中に収めたオイラットとの対立、抗争も宜なるかなである。勿論これらは象徴的な意味合いしか持たない。

実際には元朝崩壊後、漢地を失ったモンゴルに対してオイラットの勢力が上回り、トゴンとエセンの時代はもちろんのことその前後も、かつてチンギス・ハーンの大オルドであった外モンゴル一帯はオイラットの支配下

106) 那珂 1943, p. 588. 岡田 1975, p. 129.

にあったのである。

元朝崩壊後一世紀余を経て、元の遺臣、モンゴル族は再びダヤン・ハーンのもとに統一された。彼等は中国への侵寇或いは通商関係によって勢力を伸ばし、オイラットに対する征服戦争に勝利を収めながら、オイラットを圧迫して外モンゴルに住地を広げたのであった。

ダヤン・ハーンの生前から、左翼三万戸はハーンの直轄に帰し、右翼三万戸はオルドス万戸長ジノンがこれを統轄することになっていた。ところが右翼万戸の一つであったトゥメト部長アルタンは、実力において正統のハーンを凌ぐようになり、終にハーンを称することを認められ、ここに二人のハーンが併立するようになったのである。アルタン・ハーンの死後、モンゴル各部の有力な首長は、各自それぞれの根拠によるハーンを称するようになって行った。これにはチベット仏教とそのモンゴルへの弘布者ダライラマが一役買っていたことも見逃す訳にはいかない。

外モンゴルに住地を広げたハルハにおいて、最初その長ゲレセンジェの称号は、「ジャライルの皇太子（ホンタイジ）」でしかなかった。彼のホンタイジ号は、その長子アシハイが受け継ぎ、アシハイの長子もまたホンタイジを称した。ところがゲレセンジェの第三子ノーノホ・ウイジェン・ノヤンの長子アバダイは、実力において他に勝り、左翼を率いて右翼から独立してしまっていたのであった。アバダイはダライラマからハーン号を賜ったが、

彼の子孫はこの後も代々ハーンを称するようになった。右翼の方もこれに対抗して、アシハイの孫ライフルの時から、代々の右翼長はハーンを称するようになる。しかも、1677年にハルハ内部で書き留められた『アサラクチ』の系譜では、左翼に属したゲレセンジェの第四子アミン・ドゥラールの孫はシロイ・ダライ・セチェン・ハーン (Siloi dalai sečen qaγan) と言い、右翼に属したゲレセンジェの末子でウリャンハン出身の妃から生まれたサムの子もホンゴル・ジョルガル・ハーン (Qongyor jorγal qaγan) と言う。

ウリャンハンハンはダヤン・ハーンの左翼万戸の一つであったが、反乱を起こしたため解体されて、その民は他部族に分属させられた。その一部がハルハに属し、ゲレセンジェの第二妃の、ウリャンハンハンのメンドウの娘が生んだサムが、このウリャンハンハンを相続したのであった。サムの長子がハーンと称したのは、或いはウリャンハンハンを治めるハーンの意味であったかもしれない。ウリャンハン部を率いたサムの子孫はハルハ右翼のウバシ・ホンタイジとともにオイラット征伐にあたり、オイラットの故郷である今のトゥウの地に移り住んだ。清朝時代この地をタヌ・ウリャンハイ（唐努烏梁海）と呼んだのはそのためである¹⁰⁷⁾。

このように『アサラクチ』の系譜は個々人の称号まで書き記しており、極めて信用度の高いものであるが、これによる限りショロイ

107) 第五章で引用した『ウバシ・ホンタイジ伝』の初めに、「モンゴルのウバシ・ホンタイジと、ウリャンハイのサイン・マジクの二人はハンガイから四オイラットの征伐に八万の兵を率いて進軍し云々」とあったことを思い起こしていただきたい。このサイン・マジクは『アサラクチ』の系譜によると、サムの第四子で、ホンゴル・ジョルガル・ハーンの弟である。なおこのウリャンハン部については幾人もの研究者が言及しているが、誤りも少なくない。例えば森川 1972, pp. 40-41. では、ハルハに属したウリャンハン・オトクについて、単なる名称の一致だけで解体されたウリャンハンと結びつけることには問題があると述べ、「当時ウリャンハンという名前の集団はモンゴリアに広く見られた。そしてそれらのうち東部のウリャンハン三衛や、北西部のウリャンハンハンは著名なものである。」と言う。しかし、元来十三世紀初めにはウリャンハンハンはケンテイ山中のオノン河源にいた。この一部で明に降ったものがウリャンハン三衛の一つで（注44）参照）、のちハラチン部となった（和田 1959, p. 113.）。残りがダヤン・ハーンの六万戸の一つに数えられ、さらにそれが解体されて一部がハルハに属し、タヌ・ウリャンハイに住んだのであるから、これらはすべて源流を同じくする集団なのである。

・ウバシ・ホンタイジ以下祖父子三代に互るアルタン・ハーンは決してハーンとしては登場しない。三代ともホンタイジ号を有するだけである。しかし1635年第二代がロシア皇帝に宛てた書簡には明らかにアルタン・ハーン (Altan qaγan) もしくは「転金法輪宝王」(Altan nom-un kürdün-i orčiγuluγči erdeni qaγan) と自称しているのである¹⁰⁸⁾。ではこのアルタン・ハーンは、一体何に対するハーンであったのだろうか。

第四章第二節で『エルデニイン・エリケ』の記述を紹介した。それによると、ハルハ左翼のアバダイ・サイン・ハーンがオイラットを征服したのち、自分の息子シュブーダイを遣して、オイラットにハーンとして君臨させたが、サイン・ハーンが亡くなるや否や、オイラットの人たちはシュブーダイ・ハーンを捕えて弑めて叛いたということであった。シュブーダイはこの時殺されたわけではなかったようであるが、ハルハのオイラット征伐はこの後右翼のライフル・ハーンの手に移ったのである。

アルタン・ハーンの名が初めてロシア当局に知られたのは1604年のこととされるが¹⁰⁹⁾、その後1608年、トムスク市当局が勅命を受けて最初の使節団を派遣した際、アルタン・ハーンが黒カルマック即ちドルベン・オイラットに遠征中であったため、キルギス地方まで進んだだけで翌春引き返してしまったという¹¹⁰⁾。

ハルハのライフル・ハーンは1606年、エメール河口のシャラ・フルスンで四オイラットと対陣して和を結んだのであった。アバダイがかつて自分の息子シュブーダイをオイラットに遣してハーンとしたように、ライフルもまた自分の従弟ショロイ・ウバシ・ホンタイジをオイラットにハーンとして君臨させたと

筆者は考える。或いはオイラット自らがウバシ・ホンタイジを自分たちのハーンに推戴したのかもしれない。後世モンゴル諸部が満洲皇帝を自分たちのハーンに推戴した如くにある。

1616年ロシア使節が初めてアルタン・ハーンの幕営を訪れた。アルタン・ハーンと、これと交易のあった中国についての彼等の報告は有名なもので古くからよく知られている。その報告によると、アルタン・ハーンはタンヌ山脈の北のイエニセイ河支流のケムチク河から、さらに北方の同じくイエニセイ河支流のアバカン河にまで遊牧しており、ロシア使節はウブサ・ノールの湖畔でハーンと会見したという。ハーンは河川沿辺や山間を移動して遊牧しているが、冬営地と夏営地は一定しており、彼の周囲には多くの人がいた。また当時アバカン河流域のキルギス人は、アルタン・ハーンとロシア両方に対する二重貢納民であり、キルギス地方からウブサ・ノールの間の住民はすべてアルタン・ハーンに貢納の義務を負っていたという¹¹¹⁾。

翌1617年、ロシア使節の帰国に伴って、アルタン・ハーンから初めて使節がモスクワに派遣された。そこでロシア政府は今度は中国への遣使を試みるに至り、帰国するモンゴル使節にイワン・ペトリン一行がトムスクから合流して、1618年アルタン・ハーンの幕営に到着した。ペトリンらはここで中国までの案内人としてビリクタ・ラマ、タルハン・ラマの他、人馬糧食の提供を受け、北京に至ることができたのであった。ペトリン一行は帰途1619年に再びハーンのもとに立寄ったが、この時ハーンはタルハン・ラマの他八人を彼等に随行させて、モスクワに送ったのである¹¹²⁾。

アルタン・ハーンはこの時ロシア皇帝に宛

108) МИРМО 1959, док. No. 109, 110. 写真版。若松 1978a, pp. 520-521.

109) Шастина 1958, p. 19. Baddeley 1919, Vol. II. p. 7, 12. 若松 1978a, p. 520.

110) МИРМО 1959, док. No. 6. Шастина 1958, p. 22. 若松 1978a, p. 529.

111) МИРМО 1959, док. No. 20, 22. Baddeley 1919, Vol. II. pp. 46-62, 若松 1978a, pp. 522-528.

112) МИРМО 1959, док. No. 24, 33, 40. 若松 1978a, pp. 529-530.

てて、カルムックのカラクラ・タイシャが自分とロシアの間の使節の往来を妨げているので、その逆賊カラクラ・タイシャとその部民を両方から進軍して征伐しようと申し出た。モスクワ当局は結局争乱に巻き込まれるのを恐れ、アルタン・ハーンや中国・モンゴルとの使節往来を禁じたのであった¹¹³⁾。

さて、当時のカルムック即ちオイラットの状況については第五章で述べた如くである。ジューン・ガルのハラフラはこれまで考えられていたような四オイラットを率いる指導者ではなく、ドルベットのダライ・タイシ、ホシュートのバイバガスやチョークル、その他ホイトやトルグート部にも有力な首長が存在したのであった。ハラフラが自己の上にハーンとして君臨していたモンゴルのアルタン・ハーンに反抗し、服従、貢納義務を拒否したのは事実であろうと考える。しかしそれが四オイラット連合体の総意であったかどうかは疑わしい。ガワンシャラブの『四オイラット史』には次のようにある。

ダライ・タイシが自分の妻に支配させて、自分のオイラットによく言われた次第は、ドルベン・オイラットのノヤンたちの少し知ったことの次第を書く。オイラットの多くのノヤンたちが、内外を安定させないハラフラを捕えようと言った時に、ダライ・タイシは「去勢した親駱駝の積み荷は一歳駱駝には耐えられない」と言って放っておかせた¹¹⁴⁾。

しかし、ともかくもハラフラとトルグートのメルゲン・テメネがアルタン・ハーンにけんかをしかけ、アルタン・ハーンがハラフラの民を殺して妻子を奪ってしまった¹¹⁵⁾からには、四オイラット連合体は総力を挙げて戦わ

ざるを得なくなったのであった。結局この戦闘においてオイラットは勝利を収め、モンゴルに対する服従、貢納義務から解放されたのであるから、ハラフラはやはり功労者であったとは言える。

1623年、初代アルタン・ハーン・ウバシ・ホンタイジはオイラットに殺された。『ウバシ・ホンタイジ伝』によると、ドルベットのダライ・タイシの甥サイン・セルデンキがウバシ・ホンタイジに槍をつける時にこう言っている。「さあお殿様。私はあなたの麝香の匂う衣料を着せて頂いて暮して参りました。あなたの塩味のついた肉を頂いて暮して参りました。しかし今は異族なる四オイラットの名誉のために、あなたの灰色の腎臓に鋼の槍をさし上げましょう。あなたの脇腹に硬い刀をさし上げましょう。」そう言って突き刺したのであった¹¹⁶⁾。

明らかに四オイラットは初代アルタン・ハーンの臣下だったのである。では彼の第四子で第二代アルタン・ハーンを継いだバトマ・エルデニ・ホンタイジ (Badma erdini qong tayiji) —清朝史料にいうオンブエルデニ (俄木布額爾德尼) —の時代はどうだったのだろうか。

1629年秋にドルベットのダライ・タイシを訪れたウファの通弁は、このように伝えている。「イルティシュの向う側にエウンガル・ウルス (=ジューン・ガル) のカルマク人が多数いて、それらがアルタン・ハーンのモンゴル人やカルマク人と戦っている。通弁自身の滞在中、モンゴルの使者がタライ・タイシャの所に、タライがエウンガルのカルマク人を援助せず、自らの民を彼等の授助に与えぬようにと行ってやって来た。また通弁は、彼等の

113) МИРМО 1959, док. No. 56. 若松 1978a, p. 531.

114) Rincen(red.) 1967, p. 94.

dalai tayišiyigi aḡadān eželöülöd oyirodtōn sayin geqdeqsen: dörbön oyirodiyın noyodoudiyın kirēn medeqseni üye biçimüi:: oyirodiyın olon noyodoud ḡazā dotō ülü amuruuldaq xara xulayigi barya geqsen-dü dalai tayiši atani ačāgi torom dāduq bu gezi uuruuluqsan::

115) МИРМО 1959, док. No. 55, 56. 宮脇 1981, p. 45.

116) Damdinsürüng (red.) 1959, p. 188. 岡田 1968a, p. 5.

所へ中国からラマ僧が彼等を和睦させにやって来た」と聞いたが、和睦させたか否かについては聞かなかった。」¹¹⁷⁾

アルタン・ハーンがダライ・タイシに使節を派遣し、ジューン・ガルとの争いに中立を要請したのは、1629年、アルタン・ハーンがドゥチュン・カン (Дючюн-кан), 或いはチェギル・カン (Чегир-кан), 即ち内モンゴル、チャハル部のリンダン・ハーンに攻撃されたからだという¹¹⁸⁾。1631年にはトムスクに第二代アルタン・ハーンからの使節が来て、彼等をチャギル・カンから護ってくれるようロシアに懇願した¹¹⁹⁾。ここにモンゴル側からの要請により、ロシア=モンゴル間の遣使往来が再開されることになったのであるが、その後間もなくチャハルのリンダン・ハーンは亡くなり、アルタン・ハーンを攻撃する者もいなくなったため、第二代アルタン・ハーンはロシア使節に対して尊大な態度を続けたという¹²⁰⁾。

しかし、アルタン・ハーンはオイラットに対してはそういう訳にはいかなかった。オイラットに対立してきたモンゴルは、唯ハルハ部のみを残して1634年、満洲皇帝の臣下となった。ハルハ部は、今度は西隣のオイラット諸部と同盟を結ぶ以外存続の道が無くなってしまったのである。1635年第二代アルタン・ハーン・エルデニ・ホнтаイジの側近のラマ、ダイン・メルゲン・ランズがロシア皇帝に送った書簡に「アルティン・ツァーリ (=アルタン・ハーン) は黒カルマックと七年間戦った。私はアルティン・ツァーリとハラフラの

子ホнтаイジを永遠に和睦させた」とある。この和睦の時期は、初代アルタン・ハーン、ウバシ・ホнтаイジの死から七年後の、チャハル部のリンダン・ハーンがアルタン・ハーンを圧迫したという1629年のことであつたらう¹²¹⁾。

この後1688年に今度はジューン・ガルのガルダンがハルハに侵入するまで、モンゴルとオイラットの間に戦争は起こらなかった。彼等は今度は対等な関係で同盟を結んだのである。1640年のモンゴル・オイラット会議で制定されたモンゴル・オイラット法典の前文によると、ハルハ右翼のエルデニ・ジャサクト・ハーン即ちライフル・ハーンの子スバンドアイ・ジャサクト・ハーン (Subandai jasaqtu qaγan) を首領として、四十 (モンゴル) と四 (オイラット), 二つのノヨンらが大法典を記したとある。出席した王公はハルハから十三人、オイラットから十四人であった¹²²⁾。かつて四十モンゴルというのは内モンゴル諸部も含めた総称であったが、今やハルハはモンゴルの代表を自負するようになっていたのである。

ハルハ右翼のアルタン・ハーンは、もはやオイラットに対するハーンたり得なくなった。第二代アルタン・ハーンは1634, 36, 38年とロシア使節に対して尊大な態度を続けたにもかかわらず、ロシア政府が1641年に使節の交換を禁じた後は1645, 47, 48, 50年と使節の往来の復活を嘆願したのであった。アルタン・ハーンはトムスクでの貿易を望んでいたのである。しかしロシア当局からの回答の

117) МИРМО 1959, док. No. 77. 屋敷 1981, pp. 15-16.

118) МИРМО 1959, док. No. 75. 若松 1978a, p. 532.

119) МИРМО 1959, док. No. 84. 若松 1978a, p. 532.

しかし、チャハルのリンダン・ハーン自身がこの時代、外モンゴル西北隅のアルタン・ハーンを攻撃できたとは考え難い。ハルハ部におけるリンダン・ハーンの同盟者であったハルハ左翼の、アバダイにとって甥に相当するトゥメンケン・チョクト・ホнтаイジ (Tümeṅken čoytu qong tayiji) の攻撃を受けたのではないかと筆者は推定する。チョクト・ホнтаイジについては、岡田 1968b. 参照。

120) 若松 1978a, pp. 532-535. 参照。

121) МИРМО 1959, док. No. 115. 岡田 1968a, p. 14.

122) 田山 1967, 附図 p. 4. 宮脇 1981, p. 57.

ないまま、これを以てハーンからの遣使は打ち切られた¹²³⁾。

ロシア古文書史料によると、第二代アルタン・ハーンは1652年老衰の故にその子リンチン・サイン・ホンタイジ (Rinčin sayin qong tayiji) 即ちエリンチン・ロブサン・タイジに譲位したらしい¹²⁴⁾。清朝史料によると第二代が亡くなったのは1659年のことである¹²⁵⁾。

第三代アルタン・ハーン・エリンチン・ロブサン・タイジの最初の活躍は、1643年ジュン・ガルのバートル・ホンタイジ率いるオイラット軍がカザーフ大オルダのジハーンギール・ハーンを攻めた時、これに加わったことである¹²⁶⁾。1652年にはロブサンは父とともにキルギス、トゥワ両地方を掠奪し、さらにエルバ河口にまで侵入したと伝えられる。さらに1657年にはロブサン・タイジ自身が七千の兵を率いて再びエルバ河口にまで侵入し、キルギス、トゥワ諸侯から子弟を人質として取ったという¹²⁷⁾。

同年ロブサンはロシアに使者を派遣して、使節と贈物の交換を要求した。ロシアの使節団は1659年9月になってトムスクを出、1660年3月ロブサンの幕営のあるウブサ・ノール附近に到達したのである。使節団の報告によると、第三代アルタン・ハーン・ロブサンの態度は高圧的で、「たとい金銀もしくは礼物を以てしても、臣下の名を受ける気にはなれない。この世の他の一切の事物は消滅しても、名誉のみは死後も永続する。自己を他人の臣下と容認することは何人にあってもぬぐうことのできない汚点である。戦争や武力を以て強制されもしないのに自分からそのようなこ

とをしたら、私の同輩たる他のハーンや王侯たちが何と言うであろう」と、ロシア皇帝への臣従宣誓を断乎拒否したということである¹²⁸⁾。

さて1662年、第一章で述べた如く、第三代アルタン・ハーン・エリンチン・ロブサン・タイジは宗主ワンチュク・ジャサクト・ハーンを襲殺した。清朝史料によると彼はオイラットに逃れたということであるが、実際には同1662年8月にロシアの使節ラブロフ一行がウブサ・ノールの北方イェニセイ河支流のケムチク河で、アルタン・ハーンの本営を目前にして「ジャサクト・ハーン配下のアルガヌト (Алганут) 族の兵」の襲撃を受けているのである¹²⁹⁾。アルタン・ハーンは実は自己の領地であるトゥワの地に逃れたのであった。

1788年編纂の『欽定外蕃蒙古回部王公表伝』の記述はこれに続いて、ジャサクト・ハーン位は殺されたワンチュクの兄チュー・メルゲンが継いで自らハーンを称したが、この事件より八年後の1670 (康熙九) 年、清朝側はジャサクト・ハーンを自称するチュー・メルゲンが清に朝貢しなかったことを理由に、新たにワンチュクの弟チェンゲンをジャサクト・ハーンに封じたと言う。この『王公表伝』の記述は多くの疑問を含んでいる。

清朝実録によると、この八年の間、朝貢しなかったはずのジャサクト・ハーンは実は二回清廷に朝貢しているのである。第一回目は康熙六 (1667) 年八月丙申に「喀爾喀扎薩克圖汗、遣使進九白年貢、宴賚如例」とある。第二回目は康熙九 (1670) 年正月癸巳の日で、上と同文である。これは毎年一回と定められ

123) 若松 1978a, pp. 532-535.

124) РМО 1974, док. No. 129. 若松 1978a, p. 537.

125) 注2)参照。

126) РМО 1974, док. No. 64. 若松 1978a, p. 536.

『アサラクチ』の系譜による限り、第二代アルタン・ハーンの子はエリンチンの他にラマとなった者一人がいるだけであるから、ロシア史料中の「アルティンの子」はエリンチンに間違いない。

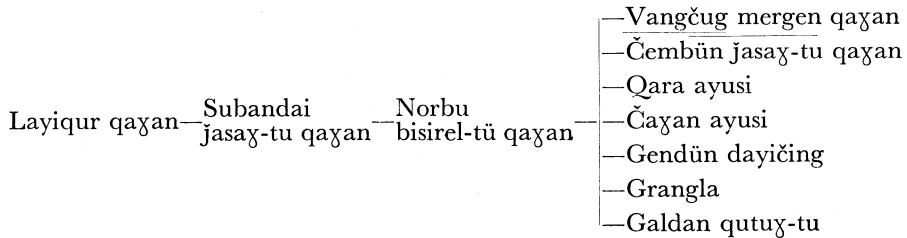
127) РМО 1974, док. No. 129. Шастина 1958, pp. 81-83. 若松 1978b, p. 2.

128) Baddeley 1919, vol. II, pp. 171-172. Шастина 1958, pp. 83-85. 日本語訳は若松 1978b, pp. 2-3. による。

129) Шастина 1958, pp. 88-89. 若松 1978b, p. 3.

た年貢であるが、八ジャサクの他の人々も決して毎年欠かさず朝貢していた訳ではないから、これを理由にチュー・メルゲンを廃して弟を新たにハーンに封じたというのは奇妙である。

実は、1677年ハルハ左翼のトシェート・ハーン部で書かれた『アサラクチ・ネルト・テウケ』の系譜には、チュー・メルゲンは登場しないのである。そこではハルハ右翼のライフル・ハーンの系統は、以下の如くである。



この系譜中のノルブ・ビシレルト・ハーンの長子、ワンチュク・メルゲン・ハーン (Vangčug mergen qaγan)こそ、エリンチン・ロブサン・タイジに殺された「ワンチュク」であり、その後ハーンを自称したとされる「チュー・メルゲン」ではなかっただろうか¹³⁰⁾。

しかも清朝実録による限り、このハルハ右翼の内紛についての情報が清朝にもたらされるのは康熙二十(1681)年が初めてであって¹³¹⁾、勿論康熙九(1670)年にジャサクト・ハーン・チュー・メルゲンを廃位した記載事項はない。『王公表伝』の記述は後世の造作に過ぎないのである。同じく清朝実録によると、康熙四(1665)年二例、五(1666)年一例、六(1667)年二例、ハルハより清朝に帰した者がいるが、このうち康熙六年にはノルブ・ビシレルト・ハーンの第五子ゲンドゥン・ダイチンが清に帰属して臣下となっている¹³²⁾。

考えられる筋書は、1662年エリンチン・ロブサン・タイジがワンチュク・ジャサクト・ハーンを殺した後、一族の誰かがハーンを自称したが、八年後ようやくノルブ・ビシレルト・ハーンの直系のチェンゲンがジャサクト・ハーン位に即くことができたということである。しかし、誰がジャサクト・ハーンを騙ったか現時点では明らかにできない。

エリンチン・ロブサン・タイジが紛争の張

本人であることは事実である。1663年エリンチンからの使者はモスクワで、アルタン・ハーンの一部族の間に紛争が起こり、ハーンは七旗と交戦中であるが、多勢に無勢で苦戦し、目下イエニセイ河上源地方に遊牧していると語っている¹³³⁾。また1665年ロシア使節はエルメク河畔のロブサンのキャンプに到着したが、ロブサンはハルハのサイン・ハーン(=トシェート・ハーン)との和議のため出立していた。しかし和平は訪れず、1666年秋、エリンチン・ロブサン・タイジはウブサ湖畔イエニセイ河支流シザ河口に堡壘を構築した¹³⁴⁾。

結局ロブサン・タイジはハルハ左翼のトシェート・ハーンとオイラットのセンゲ双方から攻撃を受け、1667年、妻子、姉妹とともにジュン・ガルのセンゲに捕えられた。センゲはロブサンの右手を手首から斬り落とし、喉に犬の肉を押し込ませて、ロブサンとその二人の妻とをオンゴノット王(Онгонотцкий царь)に与えたという¹³⁵⁾。先に1662年、アルタン・ハーンを訪れたロシア使節がジャサクト・ハーン配下のアルガスト(Алганут)族の兵の襲撃を受けたとあったことから、オンゴノット王はハルハのジャサクト・ハーンではなかったかと筆者は推定する¹³⁶⁾。

この第三代アルタン・ハーン・エリンチン・ロブサン・タイジの乱は、一つの時代の終焉を示す象徴的な事件であった。かつてモン

ゴル族は、先代のハーンの一族中最も実力のある者が次代のハーンに推戴され、一族を率いて征服戦争に出たのであった。アルタン・

ハーンの一族はオイラットの故地を住地とし、北方のキルギス地方まで勢力下に入れていた。しかし彼等のハルハ内部における席次は、右

- 130) 『アサラクチ・ネレット・テウケ』の系譜がいかに価値の高いものかについては、以下に挙げた図表から明らかであろう。これが名前と出自の記された王公の数であるが、後世の清朝史料『王公表伝』の系譜と比較していただきたい。
『アサラクチ・ネレット・テウケ』

	第二世代	三	四	五	六	七	八	計
長子	ア シ ハ イ	3	5	24	66	67	—	166
次子	ノ ヤ ン タ イ	1	2	19	35	15	—	73
三子	ノ ー ノ ホ	6	20	97	228	171	—	523
四子	アミンドウラル	2	1	11	34	23	—	72
五子	ダ ラ イ	—	—	—	—	—	—	1
六子	デル デ ン	2	9	42	71	36	1	162
七子	オトホン・サム ・ブイマ	7	16	54	79	—	—	157
総計								1154

『欽定外藩蒙古回部王公表伝』

『蒙古世系』による

	第二世代	三	四	五	六	七	八	計
長子	ア シ ハ イ 阿 什 海	2	2	5	6	15	15	46
次子	ノ ヤ ン タ イ 諾 顔 泰	1	2	6	8	9	11	38
三子	ノ ー ノ ホ 諾 諾 和	4	15	30	36	50	56	192
四子	アミンドウラル 德 勒 登	1	1	1	2	2	1	9
五子	ダ ラ イ 阿 敏 都 喇 勒	1	1	10	19	27	29	88
六子	—	—	—	—	—	—	—	—
七子	オトホン・サム 鄂 特 歡	1	2	2	4	2	4	16
総計								389

『アサラクチ』の系譜で、ゲレセンジェから数えて第七世代の王公数が減るのは、この系譜の作者自身が第七世代の人で、第七世代が出生中に書かれたためである。これだけ正確な、同時代の系譜にすら登場しないチュー・メルゲンの存在が疑わしいことは明らかである。

- 131) 『大清聖祖仁(康熙)皇帝実録』康熙二十年八月辛丑の条。
先是順治十二年間、設立喀爾喀八扎薩克、每歲獻納年貢。羅卜臧台吉、其一也。康熙元年、右翼扎薩克圖汗、與羅卜臧台吉等、內自相亂。扎薩克圖汗、旗破身亡。而羅卜臧台吉、避入厄魯特噶爾丹部下。康熙九年、特旨以扎薩克圖汗之子、襲爲扎薩克圖汗。而封阿海台吉之子阿海戴青、爲遵義彭楚克台吉、授爲扎薩克。各賜以敕印、獻納年貢。至是噶爾丹、送羅卜臧台吉、歸扎薩克圖汗。扎薩克圖汗、以羅卜臧台吉、向係扎薩克、仍令循舊制入貢。奏至。上允之。
- 132) 『大清聖祖仁(康熙)皇帝実録』康熙六年十月壬午の条。
喀爾喀畢錫勒爾圖汗之子根薩代青台吉、率衆來歸。封爲輔國公。
- 133) Шастина 1958, pp. 89-90. 若松 1978b, p. 3.
- 134) Шастина 1958, pp. 97-99. 若松 1978b, p. 5.
- 135) Baddeley 1919, Vol. II. p. 184. Шастина 1958, p. 99. 若松 1978b, p. 6.
- 136) Baddeley 1919, Vol. II. p. 74. にある1618~19年に中国を訪れたイワン・ペトリンの報告にも、アルティン・ツァーリから五日行程のウルスがアルグヌトと言ひ、トルモシン(Tormoshin/Тормошин)という王公がいるとある。そこから十日行程でジャサクト・ツァーリのウルスに至るのである。トルモシンは、スバンダイ・ジャサクト・ハーンの弟ウバンダイ・ダルマシリ(Ubandai darmasiri)であろう。

翼のジャサクト・ハーンの下風に立つものであった。すでにハルハとオイラットは同盟を結び、北方からはロシア皇帝の臣下が南下していた。しかもハルハ部の王公たちの地位はすべて世襲となり、清朝がこれを認可することが必要となっていた。モンゴルの王公はもはや征服戦争を行なうことも、実力でハーン位に即くこともできなくなっていたのであった。

この意味において、第三代アルタン・ハーン・エリンチンは、ハルハ部における最後の、古くからの伝統を受け継いだ英雄であったと言える¹³⁷⁾。

モンゴル=オイラット関係も、もはやそれのみでは成り立たなくなっていた。彼等は個々に中国とロシアに対応しなければならなく

なったのである。四百年に亙るモンゴル=オイラット関係は、1688年のジュン・ガルのガルダンのハルハ侵入を以って終結した。オイラット自体も、ジュン・ガル部の擡頭によって、三百年余に亙る連合体としての歴史に幕を閉じたのである。新しい遊放国家ジュン・ガルと、清朝の支配下に入ったモンゴルについては、いずれ稿を改めて論じることにはしたい。

[付記]

本論は、昭和54、55年度東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所公募共同研究員としての研究を基礎として成ったものである。ここに特記して同研究所と岡田英弘教授に深謝の意を表する。

参 照 文 献

- 岡田英弘. 1962. 「蒙古源流年表稿」『史学雑誌』71-6. pp. 61-70.
 岡田英弘. 1965a. 「書評、アサラクチ・ネレト・テウケ」『東洋学報』48-2. pp. 114-119.
 岡田英弘. 1965b. 「ダヤン・ハガンの年代(上)」『東洋学報』48-3. pp. 301-326.
 岡田英弘. 1966a. 「ダヤン・ハガンの年代(下)」『東洋学報』48-4. pp. 464-485.
 岡田英弘. 1966b. 「ダヤン・ハガンの先世」『史学雑誌』75-8. pp. 1-38.
 岡田英弘. 1967. 「第四回野尻湖クリルタイ」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』3. pp. 18-19.
 岡田英弘. 1968a. 「ウバン・ホントイジ伝考釈」『遊牧社会史探究』32. pp. 1-16.
 岡田英弘. 1968b. 「Čoγtu Qong Tayiji について」『アジア・アフリカ言語文化研究』1. pp. 111-125.
 岡田英弘. 1974. 「ドルベン・オイラトの起源」『史学雑誌』83-6. pp. 1-43.
 岡田英弘. 1975. 「ダヤン・ハーンの六万戸の起源」『榎博士還暦記念東洋史論叢』pp. 127-137. 山川出版社.
 岡田英弘. 1981. 「モンゴルの統一」「モンゴルの分裂」『北アジア史(新版)』pp. 135-228. 山川出版社.
 佐藤 長. 1973. 「近世青海諸部落の起源(上・下)」『東洋史研究』32-1, 2. pp. 78-105, 61-88.
 田山 茂. 1967. 『蒙古法典の研究』日本学術振興会.
 那珂通世(訳注)1943. 『成吉思汗実録』筑摩書房.
 二木博史. 1981. 「白樺法典について」『アジア・アフリカ言語文化研究』21. pp. 49-73.
 宮脇淳子. 1979. 「十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル」『東洋学報』61-1・2. pp. 108-138.
 宮脇淳子. 1980. 「わが国における十五-十七世紀の北アジア史研究」『東洋史研究』39-2. pp. 140-150.
 宮脇淳子. 1981. 「十七世紀のオイラット—『ジュン・ガル・ハーン国』に対する疑問—」『史学雑誌』90-10. pp. 40-63.
 森川哲雄. 1972. 「ハルハ・トゥメンとその成立について」『東洋学報』55-2. pp. 32-63.
 屋敷健一. 1981. 「パートゥル・フンタイジの登場—ジュン・ガル王国勃興史に関する一考察—」『史朋』13. pp. 1-25.
 山口瑞鳳. 1963. 「顧実汗のチベット支配に至る経緯」『岩井博士古稀記念典籍論集』pp. 741-773. 開明堂.
 若松 寛. 1978a. 「アルトゥン・ハーン伝考証」『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』pp. 519-542. 同朋社.

137) エリンチンはこの後も1678年にはロシアに使節を派遣し、さらにチベットに亡命して、1692年清に帰属した後、1696年清朝のガルダン討伐軍に加わって陣没した。(若松 1978b. 参照。)

- 若松 寛. 1978b. 「アルトゥン-ハーン三世伝考証—十七世紀後半の一モンゴル王侯の生涯—」『京都府立大学学術報告・人文』30. pp. 1-13.
- 和田 清. 1959. 『東亞史研究（蒙古篇）』東洋文庫。
『欽定西域同文志』上・中・下・研究篇. 1961. 1962, 1963, 1964. 東洋文庫。
『明代滿蒙史料 明夷錄抄 蒙古篇』1. 1943, 日滿文化協会。
『欽定外蕃蒙古回部王公表伝』1788. (国朝者献類徴初編卷首所収)
祁 韻 士『皇朝藩部要略』1839.
張穆撰・何秋濤增補『蒙古游牧記』1859.
馬 曼 麗. 1980. 「巴圖爾台吉与俄国」『民族研究』1980-4. pp. 26-31.
『蒙古世系』1979. 中国社会科学出版社。
Baddeley, J. F. 1919. *Russia, Mongolia, China, in the XVIIth XVIIth & early XVIIIth centuries*. Vol. II. New York.
- Damdinsürüng, Će (red.), 1959. “Mongḡol-un ubasi qong tayiji-yin tuḡuḡi” *Mongḡol uran jokiyal-un degēji ḡaxun bilig orusibai* (Corpus Scriptorum Mongolorum, Tomus XIV) pp. 184-188. Ulaḡanbaḡatur qota.
- Haenisch, E. 1955. *Eine Urga-Handschrift des mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen)*. Berlin.
- Heissig, Walther & Bawden, Charles R (ed.), 1957. *Mongḡol Borḡigid Oboḡ-un Teuke von Lomi (1732)*. Wiesbaden.
- Heissig, Walther (ed.), 1958. *Altan kürdün Mingḡan Gegesütü Biĉig, Eine mongolische Chronik von Siregetü Guosi Dharma (1739)*. Kopenhagen.
- Heissig, Walther. 1959. *Die Familien-und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen I.*, 16-18. Jahrhundert. Facsimilia pp. 86-111. Wiesbaden.
- Honda, Minobu. 1958. “On the genealogy of the early Northern Yüan.” *Ural-Altäische Jahrbücher*, XXX, pp. 232-248. Wiesbaden.
- Howorth, H. H. 1876-1928. *History of the Mongols, from the 9th to the 19th Century*. 5 vols. London.
- Lattimore, Owen. 1941. *Mongol Journeys*. New York.
- Minorsky, V. (tr.) 1963. *V. V. Barthold, Four studies on the history of Central Asia*. Volume II, Ulugh-Beg. Leiden.
- Mostaert, A. & Cleaves, F. W. (ed.), 1952. *Altan Tobĉi, A Brief History of the Mongols by bLo bzañ bsTan ḡjin*. Cambridge.
- Rev. Mostaert, Antoine & Cleaves, Francis Woodman (ed.), 1959. *Bolor Erike, Mongolian Chronicle by Rasipungsuḡ*. 5 vols. Cambridge.
- Nasunbalḡur, Će. 1958. *Sagang secen: Erdeni-yin tobci*. (Monumenta Historica Instituti Historiae Comitetti Scientiarum Reipublicae Populi Mongoli, Tomus I., Fasc. 1.) Ulanbator.
- Natcogdorji, Sh. (red.), 1960. *Galdan: Erdeni-yin erike*. (Monumenta Historica Instituti Historiae Comitetti Scientiarum et Educationis Altae Reipublicae Populi Mongoli, Tomus III, Fasc. 1.) Улаанбаатар.
- Okada, Hidehiro. 1966. “Life of Dayan Qaḡan.” *Acta Asiatica*, 11, pp. 46-55. Tokyo.
- Okada, Hidehiro. 1972. “Outer Mongolia in the Sixteenth and Seventeenth Centuries.” *Journal of Asian and African Studies*, 5, pp. 69-85. Tokyo.
- Pallas, P. S. 1776. *Samlungen historischer Nachrichten über die mongolischen Völkerschaften*. St. Petersburg.
- Paringlai (ed.), 1960. *Byamba: Asaraḡĉi neretü-yin teuke*. (Monumenta Historica Instituti Historica Comitetti Scientiarum et Educationis Altae Reipublicae Populi Mongoli, Tomus II, Fasc. 4.) Ulaanbatar.
- Ratnabhadra, 1959. *Rabḡamba Cay-a bandida-yin tuḡuḡi saran-u genel kemekü ene metü bolai*. (Corpus Scriptorum Mongolorum Instituti Linguae et Litterarum Comitetti Scientiarum et Educationis Altae Reipublicae Populi Mongoli, Tomus V, Fasc. 2.) Ulanbator.
- Rincen (red.), 1967. *Emĉi Gabang šes rab; Dörbön oyiradiyin töüke*. (Corpus Scriptorum Mongolorum Instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongoli, Tomus V. Fasc 2-3) pp. 74-100. Ulanbator.
- Верховский, Ю. П. 1960. *Рашид-ад-дин, Сборник летописей*. Том II. Москва-Ленинград.
- МИРМО 1959. *Материалы по истории Русско-Монгольских отношений, 1607-1636*. Москва.
- Позднеев, А. (ред.), 1915. *Хошуд ноюн Батур убаши түмени туурбиḡсан Дörbön ойирадийин түүке*. (Калмыцкая хрестоматия. стр. 24-43.) Петроград.

- Пучковский, Л. С. (ред.), 1960. *Гомбоджаб; Ганга-ийн Урусхал*. (История золотого рода владыки Чингиса.-Сочинение под названием «Течение ганга»). Москва.
- РМО 1974. *Русско-Монгольские отношения, 1634-1654. Сборник документов*. Москва.
- Смирнова, О. И. 1952. *Рашид-ад-дин, Сборник летописей*. Том I-2. Москва-Ленинград.
- Хетагуров, Л. А. 1952. *Рашид-ад-дин, Сборник летописей*. Том I-1. Москва-Ленинград.
- Шастина, Н. П. (ред.), 1957. *Шара Туджи, Монгольская Летопись XVII века*. Москва-Ленинград.
- Шастина, Н. П. 1958. *Русско-Монгольские Посольские Отношения XVII века*. Москва.